

第二章 立教学校の誕生

第一節 長崎通詞への英語教育と大阪の英和学舎

一 日本の英語教育需要

幕末にペリーの首席通訳官として来日した S・W・ウィリアムズと、初代駐日アメリカ総領事タウンゼント・ハリスは、一八五八年秋、来日を企図するプロテスタント宣教関係者らに対し、日本ミッシヨンの設立とその成功には、日本人への無料の医療奉仕と英語教育のための学校設立が不可欠であると、アメリカ人外交官の立場から助言していた。^①

アメリカ聖公会宣教師ジョン・リギンズは、日米修好通商条約実施以前の「一八五九年五月二日に来日し、長崎駐在アメリカ領事ジョン・G・ウォルシュ (John Gila Walsh) の推薦もあって、その数日後に長崎通詞 (通訳官) への英語教師として、滞日許可と住居斡旋という破格の条件で長崎奉行から雇用された。これが可能であったのは、二か月後に控えた長崎開港のため、税関業務を担当する日本人通詞たちへの英語教育が急務となっていたからである。リギンズは、月・水・金曜日に八人の通詞たちに英語の授業を実施し、^④二か月後にその職を終えると長崎奉行から感謝の言葉と贈物を受けた。この八人は、リギンズの来日以前、バプテスト教会宣教医マガウアンとアメリカ領事ウォルシュから英語を学んでいた人たちであった。^⑤

英語教師に在任中のリギンズは、通詞たちに宣教師として接することはできなかった。日米修好通商条約で承

認されていたのは、アメリカ国民の信教の自由と、居留地内の礼拝堂建設であった。また、長崎での踏絵は廃止されたが、日本人のキリスト教改宗は死罪になり、在留外国人には開港地の遊歩規定もあって、日本人への自由な接触も制限されていた。条約が実施されても、日本はキリスト教禁制の地であることを、英語教官を退いたりギンズは再認識しなければならなかったのである。

アメリカ長老教会宣教師 J・C・ヘボン^⑥は、一八六二年一月から神奈川で幕府派遣の委託学生に英語と数学を教え始めたが、教室にはキリスト教が教えられていないかを監視する役人が在室した。また、幕府が設立した横浜英学所では、一八六三年にアメリカ・オランダ改革教会宣教師 S・R・ブラウン^⑦が英語を教え始め、一年後にはヘボン、アメリカ・オランダ改革教会宣教師 J・H・バラ、アメリカ長老教会宣教師 デイヴィッド・タムソン (David Thompson) を教師として雇用した。さらに、長崎では、一八六四年八月にアメリカ・オランダ改革教会宣教師 フルベッキが幕府洋学所（済美館の前身）の校長兼教師となり、一八六六年ごろには佐賀藩校の到達館の教師となった^⑧。禁教令下の幕末時代、彼らはいずれも幕府や藩の公教育機関に教師として採用されたのである。

フルベッキが長崎でのちに明治政府要人となる士族らに洋学教育を施したことは、明治初期の公教育に大きな影響をもたらした。フルベッキは、一八六九年に大学南校（開成学校の後身、東京帝国大学の前身）に教頭格で赴任し^⑩、お雇い教師を斡旋する立場となった^⑪。その結果、一八七〇年代初期にはかなりの外国人宣教師が同校に赴任した。

一八七三年になると、文部省は現役の宣教師とお雇い教師の兼職を禁止したが、地方の公立学校には、一八七〇年代を通して宣教師を退任した聖職宣教師が着任した。日本人の外国語指導者がいない幕末維新期、欧米の近代科学を伝える教師でもあった学識豊かな宣教師や外国人信徒による英語教育は、日本の開化を実現するための手段として、幕府や新政府の行政当局から歓迎されていたのであった。

二 大阪男子塾の創設

C・M・ウィリアムズは、一八七二年一月一六日のアメリカ聖公会への報告で、「一つの実験として、大規模なものではなく、与力町の自宅内で小さな塾を始めるつもりです」と述べ、大阪川口居留地に隣接する内外人雑居地で男子塾を開始することを表明した。⁽¹²⁾

ウィリアムズの塾については、大阪譯者の伊沢道一が同年一月二六日（明治四年二月一七日）付の「浪華日記」で触れている。入塾予定者は一五人、年齢層は一歳から一四歳までであること、二時から四時まで英語の授業を行なうこと、与力町礼拝所のかたわらに建設予定の寮建築費のための入塾料一両以外は謝礼金を取らない予定であることが記されていた。⁽¹³⁾その後、伊沢は三月二日（明治五年一月三日）の日記で、「十三日」にウィリアムズの私塾が七人で発足したと報告している。⁽¹⁴⁾

一八七一年五月二日に来日した遣日宣教師アーサー・ラザフォード・モリス（Arthur Rutherford Morris）は、⁽¹⁵⁾一八七二年四月一二日の書簡において、塾生八人でウィリアムズの学校が発足したと述べており、二月二日を開校日としている。⁽¹⁶⁾旧暦明治五年一月「十三日」は、一八七二年二月二日であることから、両者の記録が一致する一八七二年二月二日がアメリカ聖公会日本ミッション支部の大阪ステーション（拠点）最初の私塾開校日と認められる。

また、開塾前日の二月二〇日にモリスはウィリアムズと英語教材を探しに書店に出かけていて、⁽¹⁷⁾この私塾は英学校として発足した。モリスの同年四月の書簡は、もう一クラスを担当するのが無理であれば、七、八人以上は入学させないほうがよいとウィリアムズが判断していると伝えている。さらに、この書簡では、モリスが毎日二時間教えている八人の少年は全員帯刀者であり上層階級と思われること、小規模な試みながら有益な教育事業となっていること、塾生の英語の吸収力もよく概して好調であることが記されていた。⁽¹⁸⁾ところが、開塾からわずか四か月後の一八七二年七月三日、モリスはアメリカ聖公会宛書簡で、この私塾が閉鎖されることを報告した。⁽¹⁹⁾

三 私塾の閉鎖と再開

閉鎖に至ったのは、最初に四人の男子塾生が彼らの保護者が大阪から転居するとの理由で退塾し、すぐに残りの塾生も辞めてしまったからである。しかし、元塾生の少年たちは依然として大阪に在住し、別の学校で英語を学習しており、モリスはこの理由を虚偽と推定した。ある外国人はおそらく大阪府当局が両親や少年に退塾を命じたのではないかと推測し、ある日本人も同じ見解を表明したので、モリスも男子塾の閉鎖は当局側による妨害活動の結果と疑わざるをえなかった⁽²⁰⁾。

その後、ウィリアムズは、一八七三年三月四日の書簡で、「先月初旬にわれわれの家宅内で男子校を開きました」と私塾の再開に言及している⁽²¹⁾。この男子校について、同年三月一四日のモリス書簡は、収容人数が三〇人で、二月四日に開校し、現在二八人が在籍していること、午前九時に始業、一二時から午後二時まで休憩、午後四時に帰宅という時間割で、一年以上英語を学んでいる上級クラスと初心者クラスの二つに分けられていることを伝えている⁽²²⁾。また、大阪課者伊沢によれば、午前九時から「教師メラ」の英語、一一時から「教師クインビー」の算術、午後一時に「教師ウリヤムス」の聖書、午後三時から「教師モリス」の英語、「最後ニ歌吹ヲ授ク」と報告されている⁽²³⁾。「教師メラ」、「教師クインビー」とは、一八七二年末に来日したアメリカ聖公会遣日宣教師の G・D・B・ミラー (G. D. B. Miller) と J・H・クインビー (James Hamilton Quinby) である。

この男子校では、ウィリアムズによる聖書の授業を生徒の任意選択で受けることができた。初級クラスの生徒は全員、上級クラスも多くが聖書の授業に出席するようになったため、開校半年後の夏期休暇中の一八七三年八月、ウィリアムズはもう一つの聖書クラスを開始した。この聖書クラスは、七、八人の生徒と教師で構成され、「聖書日課」を日に一時間も唱えることに意欲的な生徒が参加した。こうした大阪での宗教教育の即効性は、中国では得られなかった経験であり、ウィリアムズを励まし喜ばせた⁽²⁴⁾。

ウィリアムズは、一八七三年三月と七月の書簡で、この男子校に関して、「これまでのところなんの経費も

ミッションにかけていません。生徒は全経費に見合う学費を払っています」と、自給の学校運営を展開していることを報告している。⁽²⁵⁾ また、同年七月一〇日のモリス書簡では、四五人の生徒が在籍しており、再開してから半年足らずで、学舎建設のための設備投資を計画できるまでになったと述べられている。この時点で男子校はまだ寄宿校ではなく、与力町の礼拝堂兼大阪ステーション本部である宣教師館の部屋を使用した通学校であった。ウィリアムズは、もし適当な家屋が得られれば、同年九月の始業時には寄宿生を多数収容し、自給体制の維持と寄宿校の創設を実現しようとしたのであった。⁽²⁷⁾

四 大阪男子校の盛衰

けれども、学舎に適した邸宅の購入は難航した。一八七三年一月一九日、ようやく以前フランスのホテルだった大邸宅への移転が決まり、一月一五日に新学舎への移転を行なった。寄宿生は五人で、寮費は月二ドル、学費は月二五セントであった。⁽²⁸⁾

同年三月のモリス書簡によると、当時すでに官立校がさまざまな地区に建設され、いずれも二階建ての立派な外観であり、しかも授業料は月一二セント半とかなり低額で、アメリカ聖公会の大阪男子校と比べて半額の学費で運営されていた。⁽²⁹⁾ それでも、この男子校では寄宿校になるとともに生徒数が増加し始め、一八七三年二月から一八七四年四月には生徒五七人、寄宿生八人となった。⁽³⁰⁾

モリスは、一八七二年二月以来、大阪ステーションの男子教育事業に従事してきたが、これまで並行して携わってきた伝道事業に専心するため、一八七四年九月の新学期から男子校の管理をクインビーに譲った。男子校では、新学期から午前中の最初の時間にモリスの授業が行なわれ、午前一〇時から一二時半までの授業はクインビーが、午後の授業は一八七三年七月に来日したアメリカ聖公会遣日宣教医ヘンリー・ラング (Henry Laning) が担当した。一八七四年二月一五日のクインビーの書簡によると、登録生徒の年齢は六―二〇歳ま

で、登録者八〇人のうち一七人は出席不良で脱落している。⁽³¹⁾ また、ウィリアムズは同年二月二六日の書簡で、七八人の生徒のうち二七人が寄宿生であると述べている。⁽³²⁾

クインビーは、一八七四年二月一日の書簡で、生徒一〇〇人、寄宿生五〇人を収容するための増築工事を大工と契約するところであると記している。⁽³³⁾ 増築が完成して新しい教室へ移ったのは、翌一八七五年一月二日である。このころ全生徒七〇人のなかから、同年一月三十一日に六人、三月一日には四人が受洗した。⁽³⁴⁾ 一八七五年八月一二日に外国委員会が大阪から受け取った同年度末（一八七五年六月末）の生徒名簿によると、一〇〇人の名が記されており、そのうち二五人が受洗者であった。⁽³⁵⁾

こうして、最盛期を迎えた大阪男子校によるアメリカ聖公会の教育事業であったが、このあと次第に下降線をたどった。その原因としては、一八七五年に官立学校が外国人・日本人教師団の拡大と授業料の値下げに踏み切ったこと、さらにアメリカから帰国直後の新島襄が同年に京都に同志社英学校を創立したことが影響していたと考えられる。生徒数の推移をみると、一八七五年三月に一挙に二〇人が退学し、同年六月一日の年度終了時には二九人にまで減少した。⁽³⁶⁾ そして、同年一〇月一日の始業時の生徒数は一九人となり、さらにクインビーの療養中に減少傾向に拍車がかかり、翌一八七六年二月に八人、同年度末の六月一日にはわずか五人となったのである。⁽³⁷⁾

当時の在学生であった河島敬蔵の伝記によると、生徒の多くが官立英学校（旧制第三高等学校の前身）に転校したという。⁽³⁸⁾ ウィリアムズは、一八七六年八月七日の書簡で、「大阪の男子校はほとんどだれもないほどに減少しており、クインビー氏がそこにとどまってどんな益があるか私には分かりません」と述べている。そのうえで、クインビーが日本語で流暢に説教することができないことから、学校の再建をしばらく諦め、学校管理者であるクインビーの東京移転を示唆した。⁽³⁹⁾

第二期大阪男子校は結局、一八七三年二月から三年半にわたり運営されたのみで、一八七六年夏には再度閉校を余儀なくされるに至った。ただ、ウィリアムズは、一八七七年九月一七日の書簡で、男子寄宿校の必要性を力

説しており、学校管理のための信徒宣教師の派遣を外国委員会に強く求めるなど、決して男子教育事業を断念したわけではなかった。⁽⁴⁰⁾しかし、これ以降三年余り、大阪での男子教育事業は休止状態となったのである。

五 大阪の英和学舎（聖テモテ学校）

第三期大阪男子校は、一八七八年二月に来阪したセオドシウス・スティーヴンス・ティング（Theodosius Stevens Tyng）⁽⁴¹⁾によって始動する。ティングは、同年六月一日にアメリカ聖公会外国委員会から遣日宣教師に任命され、同年二月二五日に東京へ到着、二月一日には大阪でモリスらに迎えられた。⁽⁴²⁾ミラー、クインビーが抜けたあと、モリスが一人で担っていた伝道事業を分担する聖職宣教師の来阪であった。

ウィリアムズは、一八七九年七月に大阪を訪問し、ティング、モリス、ランニングの三人が、日本人教師らと一日に一時間か一時間半ずつ教えるということであれば、かなりよい学校になるであろうと提言した。これに彼らも同意したため、ウィリアムズは外国委員会が経費計上することを前提に、手元の三〇〇ドルを彼らに供与した。⁽⁴³⁾

こうして、大阪男子校は事実上ウィリアムズによって復興が決定された。早速、一八七九年九月二四日、大分県士族内田安定の名で「北区上福島村六百六十八番地ニ於テ一校ヲ開カントス」と第三期男子校の開校を宣言し、生徒の募集に着手した。⁽⁴⁴⁾そして、開校の許可が得られると、一八七九年一〇月に英和学校の名で外国人宣教師モリス、ランニング、ティングの三人と、日本人教師中西清および中島虎次郎ら英語、漢学、数学の教師陣を紹介し、一〇月一四日に試験を実施し一六日に開校すると伝えた。⁽⁴⁵⁾しかし、応募者が多数であったため、一八七九年一〇月二二日に英和学舎の名で、英語初心者に限っては一月初旬まで来学するよう伝えた。⁽⁴⁶⁾モリスも同年一〇月二二日の書簡で、男子校をちょうど開校したことを報告している。⁽⁴⁷⁾

その後、同年一一月二〇日付『大阪日報』によれば、英和学舎が上福島村六六八番地から江戸堀北通一丁目四番地旧三田藩邸に移転したと伝えられている。⁽⁴⁸⁾また、一八八〇年一月二二日の『大阪日報』では、「英和学舎へ風

雲館ヲ合併シ」、「新二夜学課ヲ設ケ候」として、校舎の拡大と夜学開始が報じられた。⁽⁵⁰⁾つまり、この「英和学舎」は、大阪の川口居留地内の新築校舎に移転するまで、江戸堀北通で運営されたのである。なお、英和学舎の英名「聖テモテ学校」(St. Timothy's School)の命名は、一八七九年十二月二十九日のティンク書簡で言及されている。⁽⁵¹⁾

ティンクは、一八八〇年三月一日に生徒総数を二八〇三人、同年五月末も名簿上四五人、実際は三五人と欧米とは異なる不安定さを指摘しながらも、同年六月二四日の年報では三五人の出席者のうち二〇人が寄宿生であると報告している。⁽⁵²⁾また、同年五月一二日の書簡では、将来三五〇四〇人の寄宿生と一〇〇人の学生を収容可能な学舎の建築費として、一八八〇年九月からの新年度（一八八一年度）予算に二五〇〇ドルを計上するよう求めた。これに対して、ウィリアムズは、ティンクが川口居留地の二区画を六〇〇ドルで購入可能と書いているが、居留地外では低額な税金も、二区画では年二〇〇ドル以上になることから、一区画の購入がよいかもしれないと本国に伝え、これを支持した。⁽⁵³⁾同年六月八日のアメリカ聖公会外国委員会は、当初英和学舎の建築のために二〇〇〇ドルをあてる予定であったが、ウィリアムズの指示で増額し、新築費として二五〇〇ドルを計上した。⁽⁵⁴⁾こうして、川口居留地での新校舎建築案は、一八八〇年六月に本国の了承を得て整ったのである。

英和学舎の教師団は、一八八〇年四月三〇日の『大阪日報』によると、正教師のモリス、ランニング、ティンク、マキム（一八八〇年四月九日にアメリカ聖公会遣日宣教師として来阪）、⁽⁵⁵⁾補教師の谷井正道、中島虎次郎、漢学の中島氏彬、小笠原字一良、数学の立花義誠という顔ぶれであった。⁽⁵⁶⁾また、一八八一年一月二〇日の『大阪日報』では、英和学舎の学則改正と学課増設が報じられている。⁽⁵⁷⁾

ティンクは、一八八一年三月一五日の書簡で、生徒数が四二、三人へと増加していることを報告する一方、一四歳以上か官立小学校卒業者という入学資格のため、この条件に満たない若年志願者は拒まなければならず、新校舎を得たときは予備校の開設を望んでいた。⁽⁵⁸⁾その後、同年八月一六日の『大阪日報』では、川口居留地二一番に学校を新設したこと、九月一日から移転し別棟も増築していることが伝えられ、三七人に限り「入塾」を許

可するとの広告が掲載された。⁽⁶²⁾だが、わずかその一日後、八月二七日の『大阪日報』には、建築未完成により移転は延期との訂正広告が出された。⁽⁶³⁾さらに、同年一〇月四日の『大阪日報』では、一〇月五日から移転と広告されたものの、これも延期された。結局、「当校建築悉皆落成セリ」と発表されたのは、一八八二年四月二八日の『日本立憲政党新聞』であつた。そして、初学生徒の入学は、五月一日から三日間に許可するとの広告まで待たなければならなかつた。⁽⁶⁵⁾

こうして、一八八二年五月、川口居留地二一番地に大阪の英和学舎と聖提摩太教会（聖テモテ教会）が新築された。ただし、新学舎への移転は、ウィリアムズが一八八二年九月一二日の書簡で、「私がまだ大阪にいたとき、男子校（工事中）はほとんど停滞しており、一〇月一日までに終わらないでしょう。学校は旧校舎で（九月）一八日に始まるでしょう」と述べているように、⁽⁶⁶⁾一八八二年秋からの新年度には間に合わなかつた。

六 英和学舎の退潮

英和学舎に予備校を創設することで、低学年層を吸収しようと思図したディングに対して、ウィリアムズは大阪市内や地方でのチャペル関連の教会塾を重視し、予備校への費用計上の必要性を認めなかつた。⁽⁶⁷⁾しかし、ウィリアムズの目論見とは裏腹に、教会塾はあまり成功しなかつた。そこで、ディングは一八八三年一月一日に予備校の設立に踏み切り、⁽⁶⁸⁾二〇〇〇ドルの使用許可と、予備校の校舎建築費用として八〇〇ドルの認可をウィリアムズに求めた。

ウィリアムズは、調査後に賢明と判断すれば、彼の裁可を外国委員会が認めるであろうと推量すると答えていたが、⁽⁶⁹⁾一八八三年四月になると、英和学舎も予備校も生徒数が減少しているとの情報を日本人舎主から得て、予備校の建築に対して再び否定的になった。すなわち、もし予備校が維持できなければ校舎建築費を使用することは賢明ではないと述べ、⁽⁷⁰⁾四月二一日の書簡で来年度予算からいったんは認めた予備校の校舎建築費を削除したの

である。

その書簡の注意書きによると、生徒数は最も多く出席しても二三人から一九人で、ウィリアムズの大坂訪問時には一四人しかおらず、もしこれ以上生徒数が増加しなければ建築の必要性はないと言及されていた。⁽⁷¹⁾このように、ウィリアムズは予備校の校舎建築費に関して、生徒数の増減変動を基準に判断していた。それに対して、ディングは、当初の構想どおりに低年齢層の少年が集まらず、生徒数も減少しているものの、分化した予備校の意義を訴え、さらに英和学舎と予備校の統合を要請したのである。⁽⁷²⁾

ウィリアムズの一八八三年二月二〇日の書簡は、この間の経緯を次のように述べている。同年一月に設立された予備校は、両親在阪の一〇～一四歳までの少年のクラス形成に失敗したため課程を変更し、英和学舎の低学年を予備校に編入した。ところが、これにより、予備校四〇人、英和学舎三人という予備校への一極集中という逆転現象を招いてしまった。ディングは、英和学舎への計上額を予備校と一括することを望んだが、手続き上、計上経費の変更を嫌う外国委員会の姿勢を熟知するウィリアムズは、外国委員会がその変更を認めやすいように、それを逆に英和学舎のほうに吸収するよう矯正した。ディングは、これにしたがったものの、さらに学校の来年度予算の経費に関して、ウィリアムズや日本ミッシヨン常置委員会が同意を与えそうもない多額の要求を学校閉鎖と絡ませて示した。このため、ウィリアムズは、長期間の試みによっても成果がないものに法外な経費請求を認めるよりは、学校閉鎖もやむを得ないとの考えを暗示するなど、⁽⁷³⁾学校の経営・拡張計画において、ディングと、ウィリアムズや常置委員会委員らの在日宣教師間には、大きな見解の隔たりが生じていた。

こうした兆候は、英和学舎が川口居留地二一番に新築されたところから現れていた。ウィリアムズは、一八八二年五月一二日の書簡で、同年九月から始まる新年度の予算案にディングが英和学舎の経費として要求した額に対して、「奨学金で支援される男子生徒が英和学舎にいないとき、ディングがなぜそれほど多額が必要なのか、私には分かりません。私は彼にこの問題について書きましたが、なんの返事も受けていません。経費はわれわれの

（東京の）男子校よりも、また他教派の東京ステーションの二学校よりも高額です」と報告している。⁽⁷⁴⁾

ティングの要求は一五〇〇ドルであったが、これが多額過ぎると思ったのは、在日宣教師常置委員会も同じであった。さらに、ティングが請求した書籍費は、ミッシン・ライブラリーよりも上質な蔵書を実現する規模で、それほど多量の書籍は必要と思われなかった。ほかに、居住費に関するティングの追加予算要求などがあり、ウィリアムズは一八八二年一月十七日の書簡でこれらを伝えていた。⁽⁷⁵⁾ また、この半年前の同年四月二日の書簡では、ティングが給与の値上げを要求していることも報告された。⁽⁷⁶⁾

こうしたティングの旺盛な意欲は、事業発展の促進力となり得た反面、同僚在日宣教師との軋轢を頻繁に引き起こすことにもつながった。ティングが一日に一時間しか英和学舎に割けないほどの多忙とはいえ、ティングの対人関係における摩擦は、日本人生徒や日本人信徒にも及んだ。

一八八三年九月始業の新年度（一八八四年度）からは、九月以外は英語初心者者の入学を認めないとの新学則により、生徒数は三人の寄宿生を含む五〇人以上にも増加したが、同年一月には生徒の大量退学事件が発生した。生徒たちは土曜日の授業実施をティングに要求し、対岸の旅館に籠城しそのち退学したのである。そして、この大量退学事件は、英和学舎のミッシン関連施設である同区画内の聖提摩太教会信徒の脱会事件にまで発展した。その背景には、ティングの個人的な日本語教師をめぐる複雑な対人関係の確執もあった。

ウィリアムズは、一八八五年一月二十六日の書簡で、大阪から移転直後の女性宣教師レベッカ・F・フォールズ（Rebecca F. Falls）の情報によると、英和学舎にはほんのわずかの生徒しかいなかったこと、大阪からは以後なんの通知もないことを伝えている。⁽⁷⁷⁾ その後、一八八五年六月末終了の年度末には、二四人の生徒数で終業したとティングの報告を送信した。⁽⁷⁸⁾ これは、モリス、ランシング、フランシス・J・ショー（Francis J. Shaw）、ティング夫人らが英和学舎の再建に協力し、とくにモリスが教鞭に多くの時間を割いたこと、タナカという日本人が再建に大きな働きを示したことに多くを負っていた。⁽⁷⁹⁾ タナカは、帝国大学出身で官立諸校において八年の教歴を持

ち、一八八四年冬に神戸の師範学校長職を断念して、英和学舎の英語教師と校長職を受諾した人物である。⁽⁸⁰⁾

しかし、ウィリアムズは、一八八五年五月二五日の書簡で来年度の概算要求について細目説明するなかで、ティンクが要望する「英和学舎の新校舎は現在の見込みでは必要ないように思われます」と本国に伝えた。⁽⁸¹⁾ ティンクのように、英和学舎に明るい見通しを持つことができなかったのである。こうしたウィリアムズの消極姿勢は、生徒が少々英語を習得するやいなや、首都東京に出て勉強することを望むため、彼らを大阪で二、三年以上学校にとどめておくことが非常に困難であるとの情勢を見極めてのものであった。⁽⁸²⁾

七 大阪の英和学舎閉鎖

ウィリアムズは、一八八五年一月一日になると、ティンクが訴える大阪の英和学舎の新築、経費増額、人員派遣よりも、東京の「立教大学校」に力を集中すると本国に報告した。また、ティンクが一八八六年春に休暇をとって帰国するため、英和学舎の維持が困難になるので消極的な姿勢を示した。そして、ティンクに対しては、実現の見通しが薄い英和学舎の拡大案よりも、マキムが大阪市内淡路町の聖慰主教会（The Church of the Holy Comfort in Awaji Machi）で運営する通学校のような私塾を維持すべきであると提案した。東京の三一神学校へ入学準備中の「立教大学校」の生徒や伝道師、さらに何人かの受洗者を輩出して成果をあげているマキムの私塾は、年額わずか一七五～二〇〇ドルで経営されていたのである。⁽⁸³⁾

しかし、ティンクは、その後も雑居地与力町にミッションが保有する家屋の撤去を提唱し、英和学舎の拡大案に執着した。これに対して、ウィリアムズは、一八八五年六月五日の書簡で、与力町の家屋移転は入居者のメアリー・メイルズが拒否しているため、現実的に無理であることを伝え、本国アメリカ聖公会内外伝道協合理事会（The Board of Managers of the Domestic and Foreign Committee of the Protestant Episcopal Church in the USA.）にティンクの計画を認可しないように助言するなど、⁽⁸⁴⁾ あくまで大阪の英和学舎拡大構想には否定的な態度

で臨んだ。

ウィリアムズと見解を同じくするアメリカ聖公会日本ミッション常置委員会では、主事エドモンド・ラトクリフ・ウッドマン (Edmund Ratcliffe Woodman) が一八八六年九月二二日付で、大阪の英和学舎に関する決議書簡をアメリカ聖公会内外伝道協合理事会に送付した。同年一〇月一五日にこの書簡を受け取った母教会の理事会は、一二月一五日の会議において、「理事会は、適宜と思われるときに英和学舎を閉鎖し、その計上予算を東京の立教大学校に譲渡するという、江戸伝道主教の推薦を認可する立場にある」という推薦決議を採択した。これにより、事実上、大阪の英和学舎の閉鎖が決まった。⁽⁸⁶⁾

そして、一八八七年二月七日、一二日、一四日に開催されたアメリカ聖公会日本ミッション常置委員会は、同年二月をもって大阪の英和学舎を閉校することを正式に決定した。⁽⁸⁶⁾ 大阪の英和学舎は、のちに日本聖公会を指導する聖職・教職者を輩出し、アメリカ聖公会日本ミッションの教育機関として、その使命を全うした。英和学舎の出身者には、元田作之進、名出保太郎という管轄権を有する日本人最初の主教をはじめ、小林彦五郎、近衛利澄、多川幾造、山辺久吉、尾形虎三、袋井久乃丞、清田海一郎らの聖職者がいる。このうち元田は、欧米の聖公会によって世界初の現地人主教として認知されている。そのほかの英和学舎出身者には、教役者出身者の南海電鉄社長の大塚惟明、立教尋常中学校初代校長の左乙女豊秋らが名を連ねている。

第二節 明治期ミッション・スクールの教育事業

一 初期日本人改宗者の出身階層

一八七三年二月に禁教令の高札が撤去される以前から、神戸や横浜の居留地では知事の意向もあり、キリスト教の伝道や教育に対する規制が緩和され始めていた。それは、キリスト教を通じて日本人が「英学」の習得を期

待したからである。このため、禁制下におけるキリスト教伝道事業の突破口として、「英学」を教える宣教師運営の私塾や女学校が東京や横浜を中心に設立されていた。

日本人によるキリスト教への入信は、こうした外国人宣教師や外国人信徒が開設した私塾における英学習得が契機となった。学校の寄宿舎生活や、礼拝および聖書クラスによって、日本人生徒にキリスト教信仰が浸透し、そしてその信仰と一体化した厳格な倫理的生活を体現する外国人教師や宣教師から、日本人生徒ははかりしれない人格的感化や影響を受けたのである。とくに、女学生は女性宣教師による全人格的な教えにならない、自らの教養を高める一方、キリスト者としての素直な信心から社会的弱者への奉仕活動を実践した。

明治初期の日本人キリスト教改宗者の多くは、佐幕派士族や農村の小資本家、中富農層出身であった。幕末の政争で敗れた彼らは、日本が植民地化されることなく、西洋列強と対峙するような近代化を実現するためには、西欧由来の技術やモノの習得に加えて、西洋文明の基盤にある宗教に入信することで、民と国の精神改革を図る必要があると考えた。そして、倒幕派が掌握した政界においてよりも、はるかに日本の文明化に貢献できるとの自負のもと、キリスト教界の教育と伝道による国家形成に自らの命運と活路を見いだしたのである。

一八七二年二月に大阪に設立されたアメリカ聖公会最初の男子英学塾の初年度の入学生八人は全員帯刀者（おそらく上層階級者）であった。⁽⁸⁷⁾ また、一八七四年二月に東京開市場（築地居留地と相對借地域）内に創立された同派の私塾（立教学校の前身）も、一八七六年度の在校生八〇人のうち平民層八人以外はすべて士族層であった。⁽⁸⁸⁾ さらに、一八七七年創立の立教女学校でも、一八八二年度の在校生は二〇人が士族、一一人が平民と、士族の子女が多かった。⁽⁸⁹⁾ 草創期や初期のミッション・スクールで学んだ者のなかには、自己の立身と国家の救済をかけてキリスト教に改宗した旧士族たちが多かったのである。

二 国家祝祭日行事の遵守

一八七〇年代、明治国家はヨーロッパ・キリスト教国の国家祝祭日行事を日本に導入した。日本の建国を記念する紀元節（神武天皇即位日）は、古代以来の宮中儀礼の復活に似ているが、ヨーロッパ君主国の建国記念日を明治政府が模倣したものである。また、明治天皇の誕生を奉祝する天長節は、ヨーロッパ諸帝国の皇帝や国王の生誕記念日を模倣しており、それぞれ明治起源の祝祭日であった。

太陰暦の明治五（一八七二）年一二月三日をもって、明治六年一月一日とする太陽暦の採用は、日本が西暦の世界である欧米文明国の秩序化に入ったことを意味している。旧来日本の人日、上巳、端午、七夕、重陽という五節句は廃止され、西暦にもとづく土曜日半休、日曜日、祝祭日の休日化が進行したのである。この新しい西洋準拠の国家祝祭日は、国旗を出す「ハタ日」として、伝統的な母文化にもとづく「ハレ日」と区別してよばれた。これは、彼らの日常生活や生活意識とは無縁のところ、この祝祭日が決定されたからである。明治期の日本に導入されたキリスト教も、文明の宗教として機能したのである。

旧来の暦や伝統行事に親しんできた国民が明治政府導入の新制度に違和感を覚えるなかで、西洋由来の社会制度になじんだのは、西洋人の宣教師が経営するミッシオン・スクールにおいてであった。一八八〇年代には、アメリカ長老教会系の「築地大学校」が「毎年必ず天長節には両陛下の為に祈禱会を開」き、アメリカ聖公会系の「立教大学校」が紀元節、天長節、新嘗祭を「休業日」としていたように、どの教派のミッシオン・スクールも、紀元節、天長節などの国家祝祭日行事を学校行事のなかで忠実に実施していた。

キリスト教に改宗した日本人信徒や、ミッシオン・スクールの生徒に多くいた士族出身者たちは、旧幕府時代の絶対的忠誠対象であった帰属の藩主がいなくなったことで、その忠誠対象が新国家元首である天皇へと移行した。とくに、日本人キリスト教初期指導者たちは教派を問わず、皇室に対する親近感はいわゆる強かった。欧米から導入されたキリスト教は、日本においては文明の宗教としてだけでなく、体制の宗教としても受容されたの

である。

三 ミッション教育事業の目的

ミッション・スクールは、いずれの教派もたんに教育のみを目的としていたのではなく、あくまで伝道事業という基調において運営された。そして、ミッション・スクールが堅持するキリスト教信仰は、帰属する教派のフィルタールを通すことが前提であつた。学校敷地内や周辺地に隣接する教会が説教や礼拝などを通して、ミッション・スクールの宗教教育を補完することで、学校と教会はその空間や活動において有機的に一体化して機能していたのである。その例として、アメリカ長老教会の築地大学校と東京第一長老教会、カナダ・メソジスト教会の東洋英和学校と麻布教会（鳥居坂教会の前身）、アメリカ聖公会の立教学校（「立教大学校」と築地三一教会、アメリカン・ボードの同志社と同志社教会などがあげられる）。

さらに、ミッション・スクールは、ただ日本人生徒をキリスト教入信へと導くだけでなく、将来聖職者を目指す日本人が帰属教派の神学校で学ぶために必要な学力を養うことも目的とした。立教創立者のウィリアムズは、ミッション・スクールの創設にあたつては、つねにこの高等教育機関としての役割を第一の課題としてきたと、一八八一年六月の年報で母教会に報告している⁽⁹²⁾。各派在日宣教師が本国の伝道母教会宛書簡のなかで、ミッション・スクール男子校をトレーニング・スクールとも呼称するのは、聖職者養成のための準備教育という意味からである。

ミッション・スクールはまた、日本の公教育が傾倒していく社会進化論、不可知論、懐疑論などの無神論的思潮への対抗の必要性を強く自覚していた。ウィリアムズは、初期の大阪男子校や草創期の立教学校の経験から、日本人学識層に歓迎される無神論的な傾向に危機感を抱いていた⁽⁹³⁾。寄宿舎で生徒にキリスト教信仰に合致した倫理的な生活を送らせるミッション・スクールは、キリスト教主義にもとづく全人格的教育を重視したのである。

このように、ミッシオン・スクールには、伝道のための学校経営、聖職者養成のための高等教育、無神論的風潮に対抗するための宗教教育、キリスト教主義による人格形成という四つの主な目的があった。なかでも、各派の外国人宣教師たちは、ミッシオン・スクールにおける聖職者養成を最重視し、学校卒業生が必ず学校と同じ教派の指導者になるべきであると考えていた。一方、同派帰属の日本人関係者は、キリスト教の日本人指導者育成という点では外国人幹部と目的を共有したが、外国人宣教師たちが固執した教派主義には総じて淡泊であった。というよりは、超教派志向が強かった。

また、ミッシオン・スクールを伝道事業のための教育機関とする外国人宣教師とその母教会に対して、同志社創立者の新島襄や後任の小崎弘道総長は、同志社は伝道機関ではなく、キリスト教主義を徳育とする純粹な教育機関であると主張した。外国人宣教師と日本人協力者のミッシオン・スクールをめぐる認識には微妙な溝があったのである。

第三節 立教学校の創立と建学の精神

一 東京ステーションの開設

一八七〇年代初頭、それまでアフリカに偏重していたアメリカ聖公会の海外伝道は、中国と日本を中心とする東洋伝道の再生の方向へと踏み出そうとしていた。そのきっかけとなった出来事は、ウィリアムズが一八七一年に中国ミッシオンの財政破綻問題にからめて、アメリカ聖公会内外伝道協会外国委員会の東洋伝道軽視の実態を露呈させたこと、同時期に外国委員会総主事がサミュエル・D・デニスンからウィリアム・ホバート・ヘア(William Hobart Hare)へと交代したことであった。

日本で禁教令の高札が撤去されたのは、一八七三年二月である。その約四か月前、一八七二年一〇月一七日に

開かれた外国委員会で総主事のヘアは、翌月号の伝道機関誌『スピリット・オブ・ミッションズ』に掲載予定として、日本ミッシェンの拡大方法に関する見解を提示した。⁽⁹⁴⁾すでに一八七二年八月三〇日の外国委員会では、遣日宣教師支援のためにフィラデルフィアの男性信徒から一〇〇〇ドルの寄付があつたことが報告されていた。⁽⁹⁵⁾また、同年一〇月一七日の外国委員会には、ニューヨークの女性信徒から一八七三年初頭までに一五〇〇ドルを寄付する用意があると表明されたことが報告されるなど、アメリカ本国では日本ミッシェン創設時以来、久しぶりに日本伝道への期待が高まっていた。

ウィリアムズは、一八六九年に大阪へ移住したのちも、中国・日本伝道主教の職務を兼任し、清国と日本の間を往来する多忙な日々が続いていた。そのため、一八七二年春にはすでに東京ステーション開設を構想していた⁽⁹⁷⁾が、東京拠点開設と東京移住という案を外国委員会に提示したのは、同年九月二日となった。⁽⁹⁸⁾九月一七日の母教会への書簡によると、ウィリアムズはアメリカ聖公会の首都伝道を見据えた東京進出を主張し、明治政府が信教の自由を認可するなら、日本への影響力を持つイギリスの国教である聖公会の日本国教化もあり得るとして、東京伝道を訴えた。⁽⁹⁹⁾これに答え、外国委員会は一月一九日に東京ステーションの開設をウィリアムズの裁量で進めることを認可し、一八七二年一月中旬にはアメリカ聖公会の東京進出が本国で承認された。⁽¹⁰⁰⁾

ウィリアムズは、東京拠点創設認可の通知が届く以前から、東京在住宣教師の派遣を母国の外国委員会に求めており、⁽¹⁰¹⁾また自ら東京と横浜を訪問して関東圏のミッシェン情勢を視察していた。その結果、伝道事業の運営に
なんの障害もなく、大阪よりはるかに恵まれた他教派のミッシェン情勢を目の当たりにし、東京移住と首都東京
伝道開始の思いを強くしていた。⁽¹⁰²⁾

外国委員会では、一八七三年四月三〇日にウイスコンシン教区のチャールズ・H・ニューマン（Charles Howard Newman）と、ミシシッピー教区のウィリアム・B・クーパー（William Ball Cooper）⁽¹⁰³⁾を、同年八月二九日にはクレメント・T・ブランシェ（Clement Theophilus Blanchet）⁽¹⁰⁴⁾を遣日宣教師に任命した。そして、一八七三年九月

二五日に新任宣教師ニューマンが横浜に到着するとともに東京伝道が開始された。

二 立教創立と度重なる移転

一八六七年一月二六日、幕府は各国公使と江戸鉄砲州九か町を外国人居留地とする「外国人江戸二居留スル取極」を締結した。⁽¹⁶⁾そして、一か月後には外国人が洋館を建設する居留地を船松町二丁目と十軒町とし、他の九町を内外人が随意に契約する相對借地域（雑居地）とすることを決めた。⁽¹⁷⁾だがその後、幕末維新の動乱によって造成が延期された結果、日本人家屋、旧武家邸もある内外人雑居地として、南は安芸橋川筋、西は小田原橋川筋、入船町、南八丁堀、北は稲荷橋川筋、東は大川に至る関門によって出入口を囲まれた地域と、同じ関門内の二万六一六二坪五二区画を外国人居留地として、入船町七丁目、新栄町六丁目、新湊町六、七丁目、明石町一帯と定められた。⁽¹⁸⁾

一八七〇年五月四日協定の東京外国人居留地規則附録にもとづき、同年六月二日には第一回競貸（最高値をつけた外国人に希望区画の土地を永代借地権として与えるせり）が実施された。しかし、実際に落札されたのは一〇地区にすぎず、翌一八七一年一月の第二回競貸でも三地区にとどまった。これは、莫大な工事費で地代が高額となったうえに、横浜が貿易港としての機能と重要性を確立していたからである。⁽¹⁹⁾同年一月には雑居地と居留地を囲む関門が撤去されたが、一八七二年四月三日の銀座一帯から木挽町に及ぶ大火で、外国人居留地も焼失した。この大火後、新富町と八丁堀に雑居地と居留地予備地が設定され、居留地の範囲が最終的に確定した。⁽²⁰⁾

ウィリアムズの住宅（借用か購入）探しで条件となったのは、①ミッション本部として、スタッフの住居、礼拝堂、教室、男子寄宿舎に使用でき、安価であること、②日本人との頻繁な接触や交流が可能な居留地外で、外国人名義の契約ができることであった。立地条件からみると、外国人居留地区画と内外人雑居地を含む開市場内は、低地で頻発する火事への懸念があった。一方、外国人の開市場外居住は、列強諸国の外圧を受けながらも明

治政府が開市場外の外国人居住を拒絶したことで、日本人雇用主を名義とする有期限特例の私雇教師としてでなければ不可能であった。この場合、万一名義主の日本人が事業上の破産者や債務者となれば、債権者に資産を没収されることになり、ウィリアムズ側は法的な償還請求権を持たないという資産管理面での不安が強かった。したがって、ウィリアムズの選択肢としては、開市場外での日本人雇用主の私雇教師という特例に準ずる立場をとるか、保険制度がなく火事の危険が大きい開市場内の未整備で高額な外国人居留地内か、外国人名義での契約が困難な開市場内の内外人雑居地（相対借地域）内かという、三つしかなかった。

駐日アメリカ公使ジョン・A・ビンガムに依頼していた居留地外居住の斡旋も結局実らず、一八七四年一月二二日のウィリアムズの書簡では、住宅、礼拝堂、教室、数人の寄宿舎に使用できる内外人雑居地の家屋を月額五五ドルで借りたことが報告されている。ところが、引越し直後、契約署名前の移住を逆手にとって、家主側がただでさえ割高な家賃の値上げを求めてきた。また、そもそも家主は借家ではなく売却を望んでおり、借用期間は長くて半年という条件もあつて、ウィリアムズは再度の移転を決意した。

そして幸運にも、アメリカの国民的詩人で哲学者のヘンリー・ウォッツスワース・ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）の長男チャールズ・アップルトン・ロングフェロー（Charles Appleton Longfellow）⁽¹¹⁾のために建てられた住宅を借りることに成功した。この建物は、寄宿舎としては使用できなかったものの、住宅、礼拝堂、教室、日本語教師の部屋を確保できた。ウィリアムズは、一八七四年二月三日にここに私塾を発足させたと報告している。⁽¹²⁾これがのちに立教学校と名乗る私塾である。⁽¹³⁾

こうして、アメリカ聖公会新任遣日宣教師のブランシェやクーパーたちは、一八七三年十一月の来日後、二か月半の間に三度の転居のすえ、ようやくミッシオン本部に落ち着き、日本ミッシオン東京ステーションの伝道事業は、ここを起点に創始されることとなった。

入塾者数は、ウィリアムズの開塾（一八七四年二月三日）翌日の書簡によれば八人⁽¹⁴⁾、ブランシェの後日の記録

によると五人ないし一五人（一八七四年二月二〇日の書簡）と報告されている。それだけ塾生の出入りは激しく、入学願書はほぼ毎日提出された。当時は一日に一時間ずつしか教えておらず、ウィリアムズは日本語でキリスト教教理を教え、ブランシエは英語の授業を担当した。⁽¹⁵⁾ 同年四月になると、在学生も新入生もそろって聖書学習を希望し、⁽¹⁷⁾ 学生数は三〇人近くに達した。⁽¹⁸⁾

東京移住後も行なわれたウィリアムズの中国巡回は、日本語を話す宣教師が不在となることを意味し、ミッション事業の障害になるほどであった。⁽¹⁹⁾ 生徒たちはウィリアムズを恋しがり、彼の帰任と日本語礼拝の再開を知ると歓喜した、とブランシエは報告している。⁽²⁰⁾ 大阪男子校でも生徒に人気があったウィリアムズは、⁽²¹⁾ 教育を重視するミッション事業の草創期に不可欠な宣教師であった。

その後、ウィリアムズは一八七四年六月一九日の書簡で、公使館員の開市場外居住を認める特例にない、市内移転予定のアメリカ公使館通訳官に、彼の名義を維持したままの又貸しを依頼し、市内ではないが広大で安価な住居の獲得に成功したと伝えている。⁽²²⁾ しかし、同年八月八日には多数の寄宿生を収容する大きな宿舎が必要であると述べているように、この時点においても満足な移住は実現していなかった。同年九月九日のブランシエの報告によると、諸派ミッションは築地居留地内の区画を購入して、宣教師館、教会、神学校などを建築中であり、ウィリアムズも永住する家屋が見つからない場合に備えて、臨時に居留地区画の購入を検討したが、資金難から見送らざるを得なかった。⁽²³⁾ アメリカ聖公会外国委員会の日本ミッションへの低予算が障害になっている現実もあったのである。

三 相対借地域（入船町五丁目）に定着した立教学校

一八七四年一二月二六日、ウィリアムズはもはや成果のない狭小な借家を転々として時間を浪費するより、危険を承知で日本人名義での家屋購入を選択したと報告している。この家屋は、東京開市場内の内外人雑居地（相

対借地域」の入船町五丁目一番地にある一棟およそ五〇畳の長屋三軒で、スタッフ用の六部屋、礼拝堂、一三人用の寄宿舎と四〇～五〇人用の寄宿舎、大教室の用途を満たすことができた。⁽¹²⁾ここに新たなミッション本部と私塾「立教学校」が置かれたのである。

私塾については、一八七四年二月三〇日から一八七五年二月二八日までの二か月間、『朝野新聞』に「立教学校」の名前で、「午前八時半から一二時半まで英学教授」との広告が出された。⁽¹³⁾また、一八七五年一月一日の『あけほの』新聞では、「近頃は築地入船町五丁目の壺番地にて米人ビショップウヰリヤムスブランチャット クーパルの三氏立教学校という者を開き束修もなく月謝もやすくバイブル専らに教授するよし」と報じられている。⁽¹⁴⁾したがって、一八七四年二月に開校した私塾は、遅くとも同年二月には「立教学校」と名乗っていたのである。ところで、大阪の男子校も生徒数が増加し、隆盛期を迎えつつあったが、一八七四年二月四日のウィリアムズの書簡では、次のように同校から要望された書籍リストが報告されている。

ウィルソン	初級	二五部
ナショナル	二級リーダー	五〇部
コーネル	三級リーダー	二五部
	初級地理	五〇部
クウォッケンボス	初等中学校地理	五〇部
	英文法第一巻	五〇部
	英文法	二五部
	自然哲学	二五部
デイヴィス	学校数学	五〇部
	初等代数学	二五部

英国史

二五部

スペイン派

書籍複写

一〇〇部

このころ、いずれのミッシン・スクールも立教と同じく外国語教科書を用い、ウィルソン・リーダー、ナショナル・リーダー、コーネルの地理書、バーレーの万国史などは共通教材であった。それは、大阪英語学校（舎密局の後身）のような文部省管轄の官立学校でも同じで、一八七四年の時点で、読方（ウィルソン）、地理学（コーネル）、文典（クウォッケンボス）、訳読（ナショナル）、史学（バーレー）、算術（デイヴィス）など、国書（正課外の時間）以外はすべて翻訳教科書が使われた。

小学校教育の現場では、アメリカ初等教育で使用されていたチャートを模した「五十音図」「単語図」「連語図」などの掛け図が全国各地で広く利用された。教科書も一八七三（明治六）年刊行（翌年改正版）の『小学読本』全四巻のうち、前半の第一・二巻はウィルソン・リーダーの翻訳であった。ウィルソン・リーダーはアメリカで当時もっとも普及していた初等教育の教科書で、これらを翻訳したテキストにもキリスト教の神が登場した。たとえば、連語図（『小学入門』収録）の第一図冒頭の一熟語は、「神は天地の主宰にして人は万物の霊なり」であり、『小学読本』でも、「この世界が神の創造であり、その神の恵みにたいする感謝」が教えられている。明治初期の日本の教科書は、ミッシン・スクール以外でも、創造主の神を教える外国の教科書を翻訳したものであったのである。

立教開学時の教科書リストには、英語、数学、歴史、地理の諸科目のほかに、注目すべき書籍があった。ダーウィンの進化論を社会総合哲学へと発展させたスペンサー（Herbert Spencer）派の書籍一〇〇部である。ウィリアムズは、これを意図的に入れて、当時のプロテスタント宣教師の神学理解からは有害とされた無神論的風潮を反面教師的に学ばせていた。一八七四年二月二一日のウィリアムズの書簡では、すでにヘンリー・トマス・バツクル（Henry Thomas Buckle）、ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）、チャールズ・ロバート・ダー

ウィン（Charles Robert Darwin）などを読む日本人がおり、東京と横浜にはあらゆる種類の懐疑論に日本人を洗脳する外国人がいるとして、「神の種をわれわれの生徒の心に植え、彼らが悪書を読む習慣を抑える試みとして、少しの興味深く有益な宗教書」を送ることが要請されている。のちに日本人学識層に歓迎されていく無神論、理神論、懐疑論、進化論などの横行に対して、ウィリアムズはかなり早期から危機感を抱いていたのである。

創立当初からの生徒であった貫元介の履歴書によると、初期の立教では、算術、英国史、地形学、物理学、心理学、修身学、経済学、文明史などの授業を行っていた。⁽¹⁵⁾ ウィリアムズは、一八七五年度末の年報で、ブランシェと二人で毎日それぞれ一時間から一時間半の授業を分担しながら、ブランシェの組織的な運営の効果で、六か月間の平均出席者は五五人であると伝えている。また、翌一八七六年六月の年報では、二人の日本人助手を持ち、年間平均四五人の出席者、六人の受洗―堅信、その後三人の追加受洗が報告された。⁽¹⁶⁾

アメリカ聖公会の東京ステーションは、ウィリアムズを含めてわずか三人で伝道事業が営まれており、立教の校勢が好調だけに新たな人材が必要であった。伝道事業で多忙なウィリアムズやブランシェに代わる教師として、信徒宣教師が派遣されれば、受洗者を出している立教学校はキリスト教伝道の効果的な一機関になると、ウィリアムズは一八七六年の年報で訴えていた。⁽¹⁷⁾

四 火災による立教学校の解体と再興（築地二丁目）

入船町に移転して二年足らずの一八七六年一月二九日夜半、呉服橋付近の檜物町から大火が発生し、相對借地域（雑居地）、築地居留地のある東京開市場を襲った。この大火でアメリカ聖公会日本ミッシェンの東京ステーション本部は全焼し、礼拝堂と備品、蔵書などのミッシェン財産をはじめ、ウィリアムズ、ブランシェの住宅と私財などが失われた。恐れていた火事によって、まさに壊滅的となつてしまったのである。⁽¹⁸⁾

当時、五五人（うち四六人が寄宿生）の生徒を集めて成功していた立教学校も、寄宿舎を含めて解体された。⁽¹⁹⁾

こうして、築地入船町の立教学校は炎によって幕を閉じた。

火災から二か月後、一八七七年一月二三日の時点では宣教師の住宅さえみつからない状況で、再興のめどはまったく立たなかった⁽¹³⁾。ウィリアムズは、住宅、学校、礼拝堂併設のミッション本部を諦め、礼拝堂だけ日本人名義で独立させることとし、市内深川に正規の教会建築許可を得て、外観から西洋様式とわかる深川大橋三一教会（真光教会の前身）を同年四月二十九日に竣工させた。立教学校に関しては、当局が東京開市場外一〇〇ヤード内の借家人手の許可を拒否するなどの外圧に加えて、ミッションの内情もあり、復興までにはさらに二年間が必要であった。一方、同年九月一日になると、日本人の被雇用者の教師としてブランチエが市内居住の特例許可を得て、湯島で女学校の創設に着手した（立教女学校の前身）⁽¹⁴⁾。

火災から二年後の一八七八年一月一日、大阪から東京の三一神学校（SPGとの共同神学校として発足）へ転任したクインビーは、東京に青少年の私塾（通学制）を開き、立教学校の復興への第一歩を踏み出した。彼の同年一二月十一日の書簡によると、私塾の生徒数は一六人であった。授業は、クインビーが午後二時間英語を担当し、横山錦柵がクインビーの日本語教師とともに一日に三時間担当した⁽¹⁵⁾。横山は、ヴァージニア神学校を卒業後、アメリカで執事按手を受けて、一八七七年一〇月三日に来日した聖職者である。

一八七九年一月からは日曜午前礼拝を開始した。同年七月一七日の年報によると、生徒は全部で四二人、一か月の最多数一八人、最少で九人と伝えている⁽¹⁶⁾。このように、立教復興へ向けた動きが進むなか、ウィリアムズは同年五月三〇日の書簡で、立教校舎のために臨時で日本家を借りることに言及した⁽¹⁷⁾。

立教学校では、一八七九年九月に開校願いが届け出制に改正される自由「教育令」の内示を受け、同年六月二七日付で東京府知事に「私学開業願い」を提出した⁽¹⁸⁾。それによると、立教学校の概要は以下のとおりであった。

・名称……立教学校

・場所……京橋区築地壱丁目廿三番地（山口県土族貫元介の自宅）

・学科……英学

・生徒……約四〇人で満席

・教員……宣教師クインビー（築地外国人居留地三三番に居住し通勤）と貫の二人

・教則……読法、文典、地理学、万国史、物理学、数学、作文、修身学、経済学、論理学、英国史、仏国史、米国史、近世史、代数、幾何学

・校則……授業時間は午前八時～正午一二時、午後一時～五時。休日は土・日曜、祝祭日。

入学希望者は証人保証状持参。三日間欠席は退学。放蕩無頼で行状の悪い生徒は退学。月末に一月間の「勤惰表」を証人へ郵送して報告。長期休暇は夏（七～八月）、冬（二月下旬～一月中旬）。

五 新任校長ガーディナーの来日と築地居留地進出

立教学校では、横山が心気症と診断されて実働できず、クインビーも神学校に時間を取られるなど、人材不足が顕著になったことから、ウィリアムズは学校管理者となる教師の派遣を本国に求めていた。さらに、クインビーは、離任帰国したクーパーの頭痛と同じ症状で、一八七九年二月に医者⁽¹⁴⁾の検診を受け、その後、上海、大阪への転地療養に努めたものの、快方の兆しがみられず、一八八〇年八月二七日に帰国した⁽¹⁵⁾。

ウィリアムズは、日本語に難があるクインビーにはアメリカでの聖職任務のほう⁽¹⁶⁾が適しており、健康回復後も彼の帰任を望まないと本国に伝えた。クーパーとブランシェは、この数年前からウィリアムズにクインビーの退任を本国に要請するよう勧めていた⁽¹⁸⁾。クインビーは、一八八一年二月一三日のアメリカ聖公会外国委員会⁽¹⁹⁾で事実上解任されたのち、病状が悪化し、一八八二年二月一四日に療養地のフロリダで他界した。

クインビーの帰国と入れ替わりに来日したのは、ジェームズ・マクドナルド・ガーディナー（James McDonald Gardiner）である。ガーディナーは、一八八〇年四月一五日付でアメリカ聖公会外国委員会宛に立教学校教師

への任命願書を送付しており、同年六月八日の外国委員会で、独身男性の通常の給与と経費という条件で信徒宣教師に任命された。⁽¹³⁾ 同年八月二六日にニューヨークを出航したガーディナーは、⁽¹⁴⁾ 同年一〇月一二日に東京に到着した。⁽¹⁵⁾

ウィリアムズは、一八七八年九月、築地居留地を低価格で外国人名義で借りられる可能性があること、居留地五二区画で二〇軒しかない西洋館のうち一二軒は宣教師による建築であることを報告している。さらに、他派の宣教師館は三五〇〇〜五〇〇〇ドルなので、七〇〇〇ドルで二区画の購入と二住宅の建築を望む、と二度にわたる本国に資金援助を訴えていた。⁽¹⁶⁾ これに対して、同年一〇月の外国委員会は推薦決議を採択し、ウィリアムズの要請を認めた。

この認可を喜びながらも、ウィリアムズは日本政府が外国人の居留地外居住を認める蓋然性が出てきたとし、しばらくは居留地区画の購入を見合わせることにした。⁽¹⁷⁾ だが、駐日アメリカ全権公使ビンガムの斡旋も実らず、居留地外居住は認められなかったため、ウィリアムズは唯一外国人名義の契約が可能な築地居留地内の区画を購入する決断に至った。⁽¹⁸⁾

一八七九年一二月二六日になると、三年前に入船町の東京ステーション本部を壊滅させた火事と同じ場所から出火し、大火は強風に煽られてまでも居留地を襲った。メソジスト教会では、全資産の二住宅、学校、礼拝堂のほか、宣教師の私財も焼失し、借家に居住する長老教会の独身女性は私財の半分を失った。同様に、ウィリアムズの住宅も再度焼失した。

ウィリアムズが東京進出以来、居留地内居住に反対してきた理由は、この火災であったが、居留地外での居住が認められる望みがないため、⁽¹⁹⁾ 一八八〇年一月一五日の第五回の競貸で築地居留地内の区画を購入することを決定した。この競貸で、ウィリアムズは二六番区画四八九・六〇坪を七六三円八八銭（年額地代一三七円六八銭五厘）、隣接する三八番区画四九六・七〇坪を七七四円八八銭五厘（年額地代一三九円七銭六厘）で購入した。さら

に、ウィリアムズの私財で三八番区画に隣接する三七番も購入され、その名義をウィリアムズとガーディナーとして、これを立教学校とSPGとの共同神学校の敷地予定とした。⁽¹⁰⁾

一八八〇年五月一二日、ウィリアムズは次のような理由から、男子校舎建築費として二〇〇〇ドルの計上を外国委員会に求めた。⁽¹¹⁾一つは、立教学校の校舎と寄宿舎のため、臨時に私費で購入した三五〇ドルの家屋が小規模で、一五、六人の寄宿生しか収容できないこと。もう一つは、同年四月に築地居留地七番に開校した長老教会ミッションの築地大学校（東京一致英和学校の前身）に外観で遅れをとり、すでに「非常に優秀な上級生徒」が築地大学校に転校したことである。そして、今後も学費納入生のほとんどが流出するのではないかと深刻に憂慮していたのであった。⁽¹²⁾

学校長兼任の教師として来日した信徒宣教師ガーディナーは、この新校舎問題に対して建築の才能を発揮し、煉瓦建築の計画を表明するとともに建築費として三〇〇〇ドルを要求した。⁽¹³⁾これを受けて、外国委員会は、一八八一年九月からの新年度予算に三〇〇〇ドルの建築費計上を認めた。⁽¹⁴⁾

ウィリアムズは、同年七月二七日の書簡で煉瓦建築計画を進めるには最低四〇〇〇ドル以上かかるという見通しを報告していたが、一〇月三日に新年度予算に建築費三〇〇〇ドルの計上が認可されたことを知ると、私財で三〇〇〇ドルを前貸しすることを決めた。この計上額は伝道局への有志各個教会の寄金が集まったのちに送金されるため、一八八二年春前の完成は不可能だったからである。具体的には、一八八〇年一月にウィリアムズが私財を投じて購入した居留地三七番区画に建築中の三一神学校に合体増築し、一八八二年一月に校舎に入る計画であることを本国に伝えた。⁽¹⁵⁾ガーディナーの建築計画とウィリアムズの個人投資がなければ、築地居留地のなかでもっとも壮麗な煉瓦建築といわれる、三一神学校・立教学校の共同校舎（礼拝堂・寄宿舎兼用）は実現しなかったのである。

築地一丁目の立教男子校は「貧弱な教室という大障害」を持っていたが、居留地三七番の煉瓦校舎が建築中で

あったことから、一八八二年五月には生徒数が三三人に増加し、学校も自給できているとウィリアムズは明るい見通しを伝えた。なお、このとき、立教学校に初めてセント・ポール (St. Paul's School) という英名が付与された。⁽¹⁰⁾

けれども、建築業者の工事遅延により、校舎の竣工は新年度に間に合わず、完成した新校舎での開学は翌一八八三年一月である。しかし、期待していた生徒数の急増はかなわず、年度末の一八八三年六月における年度平均在籍数は二六人にとどまった。⁽¹¹⁾

こうして、立教学校は築地居留地三七番に移転し、煉瓦建築の優美な新校舎には「立教大学校」の名が刻まれた。⁽¹²⁾ これにともない、一八七九年六月に立教学校開業願いを提出していた貫元介は、一八八三年一月二三日付で築地一丁目二三番の立教学校「私学閉業届」を東京府知事に提出した。⁽¹³⁾

ウィリアムズは、一八八〇年一月の第五回居留地競貸でせり落とされた九区画のうち三区画を得ており、一八八二年一月の第六回競貸でも八区画のうち三区画を購入した。二五番区画四八九坪を七五七円九五厘（地代一三六円九二銭）で、四〇番区画四九五・六坪を七六八円一八銭（地代一三八円七六銭八厘）で購入し、さらに私費で三九番区画四九六・一坪を七六八円九五銭五厘（地代一三八円九〇銭八厘）で購入したのである。このうち三九番については、前回の三七番と同様にウィリアムズとガーディナーの名義とされ、一八八一年八月二五日のウィリアムズの書簡によると、教会建築のために購入予定と報告されている。購入資金の原資は、一八七二年にアメリカ聖公会の女性信徒がウィリアムズの裁量で使用するよう、当時の外国委員会総主事ウィリアム・ホバート・ヘアに送金した二〇〇〇ドルで、これに付された七〇〇ドルの利子と、ウィリアムズ自身が投じた私費からの拠出であった。⁽¹⁴⁾

こうして、一八八二年六月末までに築地居留地二五番、二六番、三七番、三八番、三九番、四〇番の六区画に、宣教師館、立教学校、三一神学校が完成した。さらに、一八八四年になると立教女学校、立教教会（築地

三一教会の前身）を加えた日本ミッション東京ステーション本部を形成するに至った。

築地居留地には、外国人が醸し出す別世界に憧れ、「一種エキゾチックの気分」に陶酔する日本人が頻繁に入り込むようになった。少年時代の一時期を築地で過ごした内田魯庵は、当時一番ハイカラで一番高い教養を持っていたのはミッション・スクールの女学生であるとし、印象に残る「高德の君子」としてウィリアムズやフルベッキらの宣教師を述懐している。居留地への進出は、日本ミッションの遂行にとって最適な戦略だったのである。

ウィリアムズは、現任主教を辞職する一八八九年秋の直前、同年五月六日にも新栄町七丁目元貿易商社の跡地一部を築地居留地拡張地域とする第八回競貸で、五三番、五四番、五五番、五六番の四区画すべてを一人でせり落とした⁽¹⁶⁾。さらに、同じ貿易商社跡地の残り区画に対する一八九三年の第九回競貸でも、ウィリアムズの後任主教ジョン・マキムが、五七番、五八番、五九番、六〇番の四区画すべてを一人で購入した⁽¹⁷⁾。その結果、アメリカ聖公会は、築地居留地六〇区画のうち一四区画を取得し、全体の四分の一に近い地区を占めることになった。最終的に築地居留地では、全体の約七五％に相当する四六区画をキリスト教系ミッションの学校や教会が占めることになったのである。

第四節 立教大学校

一 キリスト教大学設立構想と宗教教育

ウィリアムズは、一八七七年九月、アメリカ聖公会日本伝道主教職を退任し、立教での教育活動に自らを捧げる覚悟を本国母教会に伝えている。一八七六年一月の火災により立教学校がまだ中断しているなか、ウィリアムズは「伝道師と聖職者を鍛錬するために寄宿校を持つことの必要性をかなり強く感じており、もし教会が私の

代わりに主教を派遣すれば、私は非常に喜んで、そのような学校の管理を引き受けましょう」と言及していた。⁽¹⁷⁾ ウィリアムズが大阪でも東京でも通学校ではなく寄宿校にこだわったのは、共同生活のなかでの宗教的影響から入信し、聖職を志願する者を輩出する望みをつねに抱いていたからであった。立教学校は、こうした精神のもとで育まれてきたのである。

ウィリアムズが立教学校で宗教教育を重視したのは、依然勢力を保持し、「若者へキリスト教への偏見をもたせる」仏教への警戒が強いことがあった。加えて、東京で最大規模の私学が反キリスト教の使徒として、ミル、バックル、トマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley)、ジョン・ティンダル(John Tyndall)の新信仰を仰ぎ、スペンサーの哲学を教えていること、官立大学もお雇い外国人教師を解雇するなど、日本の教育界が反宗教的性格に変貌しつつある現実を憂慮したからである。

そして、ウィリアムズは、一八八一年六月三日付(一八八〇年度末)の年報で、キリスト教大学の設立構想を母教会に明示した。それは、もし可能であれば、聖職宣教師に加えて四人の外国人教授を配置し、設備の整った大学を早急に創設すべきであるというもので、アメリカ聖公会在日宣教師会議でその決議を通過させることを求めている。⁽¹⁸⁾

立教学校は、一八八二年二月一九日に築地居留地三七番に移転し、煉瓦建築の新校舎に「立教大学校」の名を冠して、一八八三年一月八日に再出発した。同年一月六日の『朝野新聞』には、「今般新築に転校し規則改正本月八日より開校し英学漢学を教授す尤入舎生八十名を限りとす 築地新栄町 三十七番地 立教大学校」という広告が掲載された。

ガーディナーの設計になる新校舎には美しく高い尖塔があり、東京見物で築地本願寺を訪れた者は、そのあと必ず立教大学校に立ち寄ったという。⁽¹⁹⁾ 当時の東京案内には「東京に大学校二あり、一は本郷に又た一は築地に在り」と記されており、アメリカ長老教会の築地大学校が一八八三年に横浜の先志学校と合併して東京一致英和学

校となったのちは、東京大学と立教大学校の二つをもって大学校の代表とみる時代となった。また、「オックスフォード帽」いわゆる「モーターボート」型の角帽を最初に着用したのも立教大学生で、東京市内を闊歩してこれを誇示したといわれている⁽⁸⁰⁾。

一八八三年一月刊行の『東京諸学校規則一覽』（小田勝太郎編、英蘭堂）に掲載された「立教大学校規則」には、次のような規定があり、立教大学校が六年制であったことがわかる。

第一条 本校ハ基督教ニ基キ左ノ教科ヲ設ケ卒業年限ヲ六ケ年トス

第二条 学科ヲ分テ正則変則ノ二科トシ亦タ正則ヲ分ツテ六級トシ変則ヲ分テ四級トス 但シ一級ハ一年ニテ卒業スルモノトス

第三条 別ニ漢学科ヲ設ケ生徒ヲシテ兼習セシム

これらの規定に続いて、正則六級、変則四級、漢学科の科目名が記されている。このカリキュラムによると、英学を中心とし、英語の教科書による教育であった。科目は広く人文、社会、自然にわたり、人間形成を重視するカレッジ教育が目指されていた⁽⁸¹⁾。

キリスト教教育としては、日曜午前の定期礼拝・説教、金曜晩祷・説教、毎日の短い講義または聖書解釈のほかに、定期課程の一部として週三度の聖書の授業への出席が全学生に義務づけられていた。こうしたキリスト教教育の効果は大きく、ウィリアムズは一八八四年六月末に、「早くも最近二人が受洗し、五人が洗礼準備をしている」と述べている⁽⁸²⁾。また、ガーディナーは一八八六年二月二日の書簡で、ウィリアムズが聖書と英会話の授業を担当していることを報告し⁽⁸³⁾、一八八七年四月の書簡では、精神・道德哲学・キリスト教証拠論、聖書の分野に四番目の外国人教師が必要である旨を本国に主張していた⁽⁸⁴⁾。さらに、ガーディナーは一八八五年、聖職を志す三人の奨学生に言及するなかで、かつての立教学校での働きが彼らを日本人聖職へと喚起させ、日本における恒久的な教会の創立と自給という目的に貢献することを伝えていた⁽⁸⁵⁾。一八八一年に立教学校に神学校への準備クラス

を設ける構想を示していたウィリアムズと同様、立教大学の学長ガーディナーも、立教大学が日本人学生を
 入信へと導き、日本人聖職者を輩出する伝道機関でもあるとの認識を明示していたのである。

二 立教大学の教科と教師陣

一八八四年三月に学長のガーディナーが療養帰米したのち、立教大学の教師陣には毎日一時間数学を担当する
 ジョン・T・コール (John Thompson Cole)、毎日三時間教えるエンマ・J・フルベッキ (Emma Japonica
 Verbeck) が、同年五月からはウィリアムスン (Emma Williamson) が加わった。立教大学は、彼らと日本人
 漢学教師、訳読を毎日二時間半担当する学長代理の貫元介たちによって運営された。⁽¹⁸⁾

さらに、一八八五年四月以降はJ・H・モリーニュ (John H. Molineux) が教師陣に加わり、同年九月八日には
 学長ガーディナーが帰任した。⁽¹⁹⁾ 教師スタッフがそろった同年九月の新学期は、ウィリアムスンが大阪に転任し、
 地理学、購読・英書、英会話をエンマ・フルベッキが、数学、歴史、科学入門をモリーニュが、科学、物理学、
 英文法をガーディナーが、訳読、英語準備、漢学を貫元介が担当し、ウィリアムズも聖書と「英会話」を担った。⁽²⁰⁾

一八八七年三月八日の書簡でウィリアムズは、立教以外の二学校でも講師を務めているブラウネルと、
 一八八六年九月から療養帰米中のモリーニュの解任を伝えるとともに、アメリカ本国へ有能な人材の派遣を要請
 した。⁽²¹⁾ ガーディナーもまた、一八八七年四月の書簡で四人の人材派遣を訴えている。具体的には、算術から微分
 積分までの数学と軍事教練指導の教師、地理学・歴史・政治経済の教師、物理学・化学・自然科学の教師、精
 神・道徳哲学とキリスト教証拠論および聖書の授業の教師（聖職として立教男女校兼任）という四分野四教師の
 必要性を説き、ゆくゆくは声楽、器楽、オルガニストを兼務できる教師を招きたいと希望した。そして、一日に
 平均五時間の授業を担当するこれら四教師と、エンマ・フルベッキ、ガーディナー、日本人三教師のスタッフ体
 制で、校勢は伸びるとの見解を示した。⁽²²⁾

しかし、こうしたスタッフの充実は実現しなかった。一八八八年六月の時点でウィリアムズが要請していた三教師のうち派遣されたのは、同年五月に来日したヴィクター・M・ロウ（Victor Marshall Law）一人のみであった。⁽¹⁸⁾このため、一八八九年六月の年度末まではガーディナー、エンマ・フルベッキ、ロウの三人で六、七人分の仕事を担当する激務を強いられた。⁽¹⁹⁾ウィリアムズが現任主教を辞任する一八八九年までに、アメリカ本国の伝道協会がガーディナーの教師派遣要請に応えられなかったことは、立教大学の校勢が停滞する大きな要因となったのである。

一八八四年六月末のウィリアムズの報告によれば、総合大学や技術大学関連の徴兵回避資格を持つ高等中学校への入学希望から、英学目的で立教大学校に入学する学生数が増加していた。⁽²⁰⁾同年の学生数をみると、五月に最多数の五九人に達し、一八八五年度は五三人で終了した。⁽²¹⁾ガーディナーは、一八八五年九月の新年度始業時の登録数を九一人と報告しているが、数日から一、二か月で退学する学生が毎年続出し、最初の三か月間は新入生に訪問者、巡回学生として登録簿に記載する決意を述べるほどであった。将来的には一〇〇人の在学生による六クラス編成を構想していたが、一八八八年六月の年度末に前年度平均五七人から八二人へと増加したのをピークに、ウィリアムズが主教を辞任した一八九〇年度末には学生数が前年度の半数に落ち込んだ。⁽²²⁾

立教大学の校勢が停滞した要因の一つに、奨学制度の問題があった。一八八四年一二月、滞米中のガーディナーは同年三月までの「立教大学校の報告書」のなかで、新校舎への移転後も学校が急成長しなかった理由について、次のように述べている。すなわち、立教は慈善学校として知られているので、優秀な学生たちはそうした評判の学校へは入学しないという誇りをもっていると在学生が語ったことを紹介したうえで、信徒か信徒の家族構成員への教育のための奨学制度が、現実には資金援助のみを目的としてキリスト教に接近する学生を出現させる弊害を指摘したのである。これは、受洗し成績も優良であった四人の奨学生が、独断や親戚の強要で退学したり、立教の貧弱な教師陣のため帝国大学の政治経済を受講したり、官立の電信学校の課程に入ったりする現状を

憂慮しての提言であつた。⁽²⁰⁾

ウィリアムズも、一八八四年三月六月の「立教大学校の報告書」で、約六ドル以外は学費によつて全経費が支出され、来年度は外国人教師の給与以外の全経費を学費で賄うことで、基本的に自給体制への移行を志向していると述べている。⁽²¹⁾ ガーディナーもウィリアムズも、完全な奨学制廃止を進言したわけではなく、聖職志願者たちの育成のために、六、七人ほどの一定した少数の奨学生は必要であると考えていた。⁽²²⁾ 立教大学校の初期には奨学制度が悪用されたり、好ましくない知名度が定着してしまったことにより、校勢の停滞を招いていたのである。

三 立教存続の危機

ウィリアムズは、一八八七年一月七日の書簡で、アメリカ聖公会の伝道母体が現地から要請される設備の充実や運営のための資金、人材派遣に應えられない状況を憂えていた。こうした資金・人材不足から、学長ガーディナーは立教大学校の運営を断念し、英語講師として勤務している隆盛で大規模な私立校での授業に力を注ぐことを考え始めていると本国に伝えた。

ウィリアムズによると、当時日本の私立校では英語講師の需要がかなりあり、このような学校では一日に数時間教えることで、聖書を教える機会が得られるとともに、多くの学生に接することができた。たとえば、在学生六〇〇人のある学校では、一日に二時間教える教師を月額六〇ドルで募集し、また別の学校では、一日に三時間教える教師を月額五〇ドルで二人求めている。後者の学校は、以前ページ (Henry D. Page) が、その後ガーディナーが週に二日午後に加えている私立校で、英語教科の全管理をガーディナーたちに委任する用意があるといわれた。また、学生への宗教的指導にも積極的であり、学校の敷地内か近所に建設されるチャペルでの毎日の祈祷も可能であつたため、ガーディナーは在学生が三〇〇人以上になれば、この学校で働くほうが、教員や資金の増強が望めない立教大学校に執着するよりも有益ではないかと考えたのである。⁽²³⁾ これは、ある意味で立教存続

の危機であつた。

実際、ガーディナーは、一八八七年二月から一二〇〇人の在学生を擁する神田の共立学校（現・開成中学校・高等学校）で、月・水・木曜日の午後計週一二時間教えていた。一方、以前ページが講師を務めた東京専門学校（現・早稲田大学）では、火・金曜日の午後計週六時間の授業を担当した。東京専門学校の場合、週に一度四四人の低学年層にも英語を教え、その多くが放課後の一時間、英語による聖書の授業を受けていた。

立教大学校は、ウィリアムズが望んだような成長をみせていなかったが、彼には長い試練なしに廃校にするこゝとへのためらいがあつた。長老系諸派は合同し（東京一致英和学校―明治学院）、メソジストも教育事業に力を入れるなど（東京英和学校―青山学院）、ミッション系諸学校が教育水準を上げていた。こうした動向と歩調を保つためには、英国教会（聖公会）系ミッション（SPG、CMS）が学校に投資しない以上、アメリカ聖公会ミッションが独力で立教の校勢の増幅を図らなければならなかつたのである。

ウィリアムズは、このような考え方にもとづき、学生数を一〇〇人に伸ばすことができれば、立教を断念しないほうがよいと、ガーディナーの立教断念案に消極的な見解を示し、本国に対して立教への資金援助をうながした。⁽²⁸⁾一八八七年二月は校勢不振の大阪の英和学舎を閉鎖し、東京の立教大学校に統合させる時期にあつた。このとき、もしウィリアムズが立教維持の方針をとらなければ、アメリカ聖公会の男子教育事業は途絶え、現在の立教はなかつたかもしれない。

ガーディナーが講師として教えている共立学校の二一二人の学生のうち、日曜午前に行なわれる聖書の授業を受けたのは八〇〇八五人であつた。さらに、このうちの何人かと東京専門学校の多くの立教大学校での日曜学校（日曜午後）に定期的に出席した。こうした学外宗教教育を実践しながら、ガーディナーは立教を維持することに同意し、一八八七年四月一日の書簡では、新任教師の配備と運営資金の増強を訴えた。⁽²⁹⁾そして、同年六月の年報で、立教大学校の運動場用地を獲得すること、学生数が増加した場合は三一神学校との共有校舎から移転

することを提案した。⁽²⁰⁸⁾

一方、ウィリアムズは、一八八八年六月の年報で、三一神学校の校舎を新たに建築し、それまでの共有校舎は立教大が使用するという計画を報告した。⁽²⁰⁹⁾その後、三一神学校は、一八八九年購入の築地居留地五三番に新築された校舎に移転し、立教は、一八九四年の東京大地震まで築地居留地三七番にとどまった。⁽²¹⁾それは、アメリカ聖公会がガーディナーの立教拡大計画に迅速に応えず、日本では欧化主義時代の終焉とともに国粹的な排外主義が吹き荒れ、立教大の校勢が衰退していくなかで実行されたものである。ガーディナーは、一八九〇年末に「校史のなかでも危機的時期にいる」と述べているが、まさにこうした情勢を見据えての判断であった。

四 「和名」「立教」の由来

従来語られてきた和名「立教」の由来は、宋学の樹立者である朱子の高弟劉子澄が著した『小学』立教篇から採られたと「考証」されている。さらに、それは「漢学者による命名に違いなく、宣教師たちの日本語教師であった古瀬清寧であろうと推定されている」というものであった。⁽²¹²⁾

ところで、一八八三年に刊行された日本聖公会祈祷書『聖公会祷文』増補版の教会歴には、聖職按手節を意味する表現として「立教師節」という言葉がある。「立教師節」の「教師」は聖職を、「節」は降臨節や降誕節などの教会歴の単位を指し、「立教師」とは、聖職を立てるといふ聖職按手を意味する。和名「立教」は、ここに由来するのではないかとの新説が近年提起されている。⁽²¹⁴⁾ただ、「立教師節」という言葉が記されている祈祷書『聖公会祷文』増補版が刊行された一八八三年は、一八七四年の立教創立から九年後にあたる。

ここで、日本聖公会最古の祈祷書群を検証しよう。英米由来の聖公会祈祷書は、公祷・サクラメント・諸式の三部から構成されている。一八七八年刊の日本聖公会最初の祈祷書『朝晩祷文附リタニ』は公祷部分のみである。その公祷にサクラメントを加えたものが、一八七九年に刊行された第二の祈祷書『聖公会祷文』である。そ

して、これに諸式を加えて三部構成としたものが、一八八三年に刊行された第三の祈祷書『聖公会祷文』（増補版）であった。この第三の祈祷書のなかに「立教師節」という言葉が登場する。

第一・第二の祈祷書にない「諸式」の「目標」（目次）をみると、早祷文（一頁）、晚祷文（一九頁）、リタニー（三四頁）に続く四番目の「諸式」の筆頭部分に「臨時祈祷文」（四五頁）がある。「臨時祈祷文」は、祷文・謝文の順で題目があげられている。

祷文の題目を最初からみていくと、「求雨祷文」（あめをもとむるのいのり）、「求晴祷文」（はれをもとむるのいのり）、「求免飢荒祷文」（ききんをのぞくことをねがうのいのり）、「求泰平祷文」（たいへいをねがうのいのり）、「求免瘟疫祷文」（はやりやまいをのがるをねがうのいのり）に続き、第六番目に「立教師節祷文」（きょうしをたてんとせるせつのいのり）が登場する。水、日光、食物、平和、健康という人間が生きていくうえで必要不可欠なものを求める祈りに続いて、最初に祈られたのが聖職者を求めることであった。その説明書きには「教師ヲ立ル定日前七日間此文ヲ誦ムベシ」とあり、執事接手が決定した神学生（聖職候補生）のために、聖職接手日の一週間前から祈ることとされた。この「立教師節祷文」は、一八八八年版と一八九〇年版の『聖公会祷文』にも、まったく同じ箇所と同じ表記と内容で記載されている。

では、この「立教師節祷文」の語源を探ってみよう。じつは、一八八三年刊の祈祷書『聖公会祷文』の祷文と謝文の題目群のほとんどは、中国語祈祷書『教会祷文』から採用された表記であった。これを指摘した矢崎健一（元立教大学教授）によると、『教会祷文』の「随時祷文謝文」における一五題目がほとんど同一のもので、二番目のみが増えられ、七項目は新たに訳出されていた。そして、問題の「立教師節祷文」は、『教会祷文』のなかの「将立教師祷文」「又将立教師祷文」とほぼ同じ表現である。⁽²⁵⁾ この中国語祈祷書『教会祷文』の刊行は一八七二年で、立教設立の二年前であった。つまり、和名「立教」の語源は、この時点で一八七二年まで遡ることができる。

この中国語祈祷書『教会祷文』は、アメリカとイギリスの祈祷書から、駐清アメリカ聖公会宣教師と駐清イギリス宣教師が協働して訳出したものである。アメリカ側の翻訳者は、当時アメリカ聖公会第二代中国・日本伝道主教ウィリアムズの管轄下の遣清宣教師 S・I・J・シュレシエフスキー (Samuel Isaac Joseph Shereschewsky) であった。彼は、のちに北京語に旧約聖書を訳出・刊行するなど当初から言語学者として著名で、ウィリアムズ後任の第三代中国伝道主教となり、中国の聖約翰大学 (St. John's University, Shanghai) を設立した人物である。イギリス側の翻訳者は、当時英国教会駐清宣教師 J・S・バードン (John S. Burdon) で、のちの英国教会第三代香港ヴィクトリア教区主教である。

この中国語祈祷書『教会祷文』の原型は、一八六八年ごろにはすでに存在していたようである。同年にシュレシエフスキーとバードンとが共同で北京語訳祈祷書を出版し、シュレシエフスキーからその裁可を求められた当時の中国伝道主教ウィリアムズは、本国のアメリカ聖公会に問い合わせていた。これに対してアメリカ聖公会は、ウィリアムズに香港ヴィクトリア教区主教と相談し、合意事項を送信するよう求めたのであった。しかし、アメリカ聖公会から返答を受け取ったあと、香港ヴィクトリア教区主教はすぐに帰国、辞任したため、ウィリアムズはイギリス人主教と相談する機会がなく、この問題はしばらく宙に浮いたままとなっていた。その後、日本語訳祈祷書関連で同様の訳語問題が発生し、ウィリアムズが本国に対して、イギリス側との共同で日本語訳祈祷書を持ちたいと再度問題を提起したのである。⁽²⁶⁾

矢崎によると、一八七二年の『教会祷文 卷上』は北京語の官話体であるが、それより古いとされる刊行年不記載の『教会祷文』を見たことがあり、それは漢文体であった。矢崎は、おそらくこの古い漢文体の早祷文・晩祷文・総祷文から、一八七二年に刊行された官話体『教会祷文 卷上』の早祷文・晩祷文・総祷文が作成されたと推測している。⁽²⁷⁾ このより古い年代と思われる漢文体の『教会祷文』こそ、一八六八年にシュレシエフスキーとバードンとが共同で出版していたという北京語訳祈祷書であろうと思われる。アメリカ聖公会中国伝道の管轄権

を持ち、やがて立教を創立するウィリアムズは、シュレシエフスキーから直接その報告を受けていたと考えられ、中国語の祈祷書事情については、日本ではほかの誰よりも熟知していたのである。

ウィリアムズは、来日前の三年間にわたる中国伝道の経験から、中国語で説教ができるほど中国語に造詣が深い人物でもあった。一八六六年から八年間は、中国と日本の伝道主教を兼任し、中日間を往来していたが、たとえば、一八七三年に訪中（清朝）した際、複数の中国語を使用するため、日本語を忘れがちになったという。その逆も同様で、翻訳活動に大きな支障をきたしていると述べるなど、両国語に通じていたことを示唆しながら、中国・日本兼任主教からの解放を母教会に強く訴えたことで、翌一八七四年に日本専任の伝道主教になっている。⁽²⁸⁾まさにそれが立教創立の年であった。

中国語に堪能であったウィリアムズであれば、「将立教師祷文」という言葉が北京祈祷書のなかで使われていることは確実に知っていたはずである。その「将立教師祷文」から日本語祈祷書の「立教師節祷文」への転用は、ウィリアムズにとつてたやすいことであった。しかも、中国語祈祷書も日本語祈祷書もアメリカとイギリスの祈祷書からの翻訳であり、その源泉は同一であった。北京語祈祷書の『教会祷文』の刊行は一八七二年、その源流の出版は一八六八年であり、前者は立教設立の二年前、後者は六年前のことである。

その後、アメリカ人宣教師とイギリス人宣教師の協働による最初の日本語祈祷書を実現させるため、ウィリアムズはイギリス人宣教師が来日したところには、在日一八年をかけてアメリカ版祈祷書の日本語訳を大部分完了していたにもかかわらず、アメリカ版祈祷書の日本語訳の単独出版を遅らせていた。日本聖公会の祈祷書和訳のほとんどの基礎はウィリアムズによるものであると、アメリカ聖公会遣日宣教師で立教女学校設立者のブランシェは証言している。⁽²⁹⁾

ここから推量すると、「立教師節祷文」という言葉は、ウィリアムズ自身の訳出に由来するとも考えられる。いずれにせよ、一八七二年刊行の北京語祈祷書『教会祷文』に「将立教師祷文」という言葉が存在し、その祈祷

書をウィリアムズが認知していたという事実を考慮すれば、一八七八～七九年に日本語祈祷書が出版される以前から、ウィリアムズが「立教師節祷文」あるいは「立教師」という表現を用いていた可能性はかなり高いといえる。日本語祈祷書『聖公会祷文』に記載された「立教師節祷文」の語源である、中国語祈祷書『教会祷文』の「将立教師祷文」に由来する説のほうが、従来漠然と和名「立教」の源泉と推定されてきた漢籍「『小学』立教篇」由来説よりも、説得力があるものと思われる。

既述したように、他のミッション・スクール諸校と同じく、立教学校も聖職者の養成を第一の目的として設立されていた。ウィリアムズは、一八八一年の年報で、母国のアメリカ聖公会伝道機関に「教育」と題して、次のように述べている。

若者がキリスト教の影響下にもたらされるかもしれない高等の男子校の必要は、もし彼らが信徒となるなら、伝道師や福音聖職者へ彼らを導く神学の課程に入るための準備となり、その必要はミッションの最初から感じられていて、諸学校の創設はいつもそれを第一の問題として維持されてきました。⁽²⁰⁾

この三年前、一八七八年には日本聖公会最初の日本語祈祷書である『朝晩祷文附リタニー』が刊行され、立教学校の食堂を臨時の講義室として三一神学校が創設されていた。そして、築地時代から昭和の戦後直後に至るまで、立教と聖職者養成機関である神学校は、同じ校舎か、隣接するか、通りをはさんで向かい合うかなど、さまざまな形をとりながら併存し続けてきた。立教に神学校への準備クラスを設けるというウィリアムズの将来構想⁽²¹⁾を校長ガーデイナーも共有したように、立教は建学時から日本人聖職者を輩出するための高等教育を施す伝道機関としての目的をつねに保持していたのである。

第五節 国粹主義と立教学校

一 欧化主義と国粹主義

立教学校の創立から二か月後、一八七四年四月の『明六雑誌』三号に津田真道は、国民の開化を進める方法はキリスト教以外にないと書いた。また、一八七六年二月には日本最初のキリスト教新聞である『七一雑報』も、キリスト教を文明の宗教と自負する記事を掲載した。このように、一八七〇年代の日本では文明開化とキリスト教がほとんど同義語となり、一八八〇年代の欧化主義時代まで西洋文化とキリスト教は一体化の様相を呈していた。

一八八三年一月には立教大学校が発足した。この年の五月には第三回全国基督信徒大親睦会が開催されたが、これに参加した関係者たちの多くは、毎年二、三割の信徒増加率をみて、日本は近くキリスト教国になると信じたとされる。鹿鳴館が開館したのは、その半年後の一月二十八日である。

カナダ・メソジスト教会が一八八四年に設立した東洋英和女学校は、政府の高位高官、実業家、地方の資産家の令嬢が入学し、華族女学校（女子学習院）が一八八五年一月に開校するまでは、麻布で華族の女学校の役割を果たしていた。また、一八八六年に番町教会（現・霊南坂教会）を設立した小崎弘道は、大臣格や政府高官とその夫人らが大勢教会員になったことを誇らしげに語っている。明治前半期の時代は、キリスト教会とミッシェン・スクールにとって追い風が吹いたのである。

大日本帝国憲法が發布された一八八九年二月一日は、キリスト教関係者にとっても節目の日となった。その第二八条で「安寧秩序ヲ妨ケス臣民タルノ義務ニ背カサル限り」という条件つきながら、信教の自由が保障されたからである。他方、帝国憲法第三条では、「天皇ハ神聖ニシテ犯スヘカラス」と規定された。そして、この帝国憲法発布の日にはキリスト教伝道の流れを変える事件が起こった。不敬とキリスト者という風評から、文部大

臣の森有礼が暴漢に刺殺されたのである。欧化主義の終焉とその反動としての国粹主義時代の幕開けであった。

翌一八九〇年一〇月三〇日には教育勅語が發布され、一八九一年一月九日に第一高等中学校で明治天皇「睦仁」の署名入りの教育勅語奉読式が行なわれた。その際、参列者の眼に「低頭」と映った教員内村鑑三の「奉拝」が不敬とされ、大きな問題となった。世間の非難を浴びた内村は、風邪に感染して意識不明のあいだに他人が書いた辞職願により失職、妻も他界するという悲運に陥った²⁰⁾。内村の事件を契機に、帝国大学教授の井上哲次郎は、忠孝主義を基軸とする国家主義教育と、非忠孝主義の宗教であるキリスト教とは衝突するものと説く『教育ト宗教ノ衝突』を著した。この問題をめぐっては、一八九三年から翌年にかけて大論争が展開された。キリスト教側の論者たちの見解は、わずかな例外を除き、キリスト教は国家主義に背反するものではないとする弁明が大部分であった。教育勅語がなかば疑似宗教聖典と化し、明治後半期に始まる国粹主義・排外主義のもと、ミッシン・スクールにとっては逆風の時代が到来したのである。

二 立教の日本化改革

明治後半期に国粹主義の気運が生じると、立教大学校では、学則があまりにも外国的で、学校運営がまったく外国人の手にあり、学生の希望が反映されていないと訴える改革運動が学生のあいだから起こった。小林彦五郎、大須賀（石井）亮一、早川喜四郎、松井（杉浦）貞二郎、岩佐琢蔵、阪井徳太郎らの在学生らに加え、名出保太郎、杉浦義道、皆川晃雄ら三一神学校の神学生もこの運動を支援した。彼らは大阪泰西学館教頭であった左乙女豊秋を学内改革断行のために招聘することを決め、杉浦義道が校長ガーディナーと交渉、大須賀亮一が大阪で左乙女にこれを伝えた。

ウィリアムズとガーディナーは学生の要望を受け入れ、左乙女は一八九〇年二月に上京して主監に着任した。左乙女は、同年一〇月に立教大学校から立教学校に校名を改称し、それまでのアメリカのカレッジ教育に替え

て、修業年限を五年（尋常中学校の三年と高等中学校の二年に相当）とする改革を行なった⁽²⁾。そして、ガーディナー、エンマ・フルベッキ、エンマ・ウィリアムソンら外国人の担当科目を英語や英文学に限り、そのほかは日本人教員が担当することとした。一八九一年八月の『私立立教学校規則』（以下、『規則』）によると、校長のガーディナー、主監の左乙女に続き、教頭として木村駿吉（物理学、数学、天文学、地文学）の名があげられている。さらに、浅越金次郎（数学）、大久保雄輔（図書）、市川勝太郎（地理、読解）、久保田富次郎（歴史、論理、経済、読解）、市岡太次郎（化学、鉱物学、地質学）、河村九淵（動物学、植物学、生理学）、赤尾戒三（漢文学）、熊田鉄次郎（国文学、漢文学）、石黒行平（体操）、玉置角之助（舎監）が教員スタッフであった。そのほか、大阪から転勤してきたティンク（心理学、道義学、英文）の名も記載されている⁽³⁾。

一八九一年八月の『規則』に記載された内容から、この時点ではまだガーディナーが校長を務めていたことがわかる。ティンクがガーディナーの後任校長に着任したのは、一八九二年七月一日である。つまり、ガーディナーは、一八九二年六月の年度末まで校長の職にあったのである⁽⁴⁾。

同じ一八九一年八月の『規則』では、立教大学校時代の学科であった「聖書」が「倫理」に替わり、「基督教確証」が外された。また、『規則』に記載された「立教学校教育ノ旨趣」（以下、「旨趣」）は、学校の目的について、「道徳ノ涵養、志操ノ修練ニ至リテハ、本校ノ誓ヲ自ラ任スル所」としたうえで、次のように述べている。注目すべきは、キリスト教主義という言葉が消えていたことである。

本校ノ目的スル所ハ、善良ナル公民ヲ造出シ、業ヲ卒ヘテ、直ニ社会ニ出ツルモ、自営自立ノ途ニ於テ、支障ナキ程ノ知識ヲ与ヘ、或ハ卒業ノ後、尚専門ノ学芸ニ従事スルノ希望ト、余力ヲ有スル者ヲシテ、自修ニ差支ナキ程ノ学力ヲ養成セシムルニ在リ⁽⁵⁾

一八九二年、一八九三年の『規則』における「旨趣」は、一八九一年のものとはほとんど変わらないが、一八九四年九月になると、同年八月開戦の日清戦争の直後ということもあってか、以下のような表現の変化がみ

られた。

我カ国民教育ノ旨義ヲ極言スレバ国家ノ氣運ヲ開拓シ特立セル国民ノ世界ニ対シテ其ノ文明ヲ翼賛スベキ天職ヲ宣揚スル所ノ国是ト一致センコトヲ期スルモノナリ区区本校ノ如キ亦タ国民教育ヲ以テ自ラ任ズル者ノ責任モ亦タ遠クシテ且ツ大ナリト謂ツベシ⁽²⁰⁾

以上のように、国家主義的思潮の影響が感じられる内容となったのである。

三 カレッジ構想

一八九二年九月には校長がガーディナーからティンクに代わり、庶務に玉置角之助が就いた。外国人教員では、修辞・作文にW・D・コックス(W. D. Cox)、英語にE・ウィリアムソンとS・S・スプレイグ(Sarah S. Sprague)が、日本人教員では、英文学に高橋五郎、漢文学に地引順二が加わり、体操は松下一郎に代わった。⁽²¹⁾

一八九三年九月からは、外国人教員に校長ティンク(心理、道義)、ガーディナー(英文学、英語)、ウィリアムソン、フルベッキ、スプレイグ(いずれも英語)が、日本人教員に玉置角之助(事務員兼舎監)、神山唯次郎(英語、英書、訳読)、園部寅吉(数学)、野田貞(物理、天文)が加わった。⁽²²⁾

一八九四年九月には外国人教員として、ティンク、ガーディナー、マリー・チーラルマン、リサ・ラベル(Lisa Lovell)、リサ・ラポール(いずれもドイツ語)、F・マックレー(ギリシャ語)、ウィリアムソン、スプレイグ(いずれも英語)が増員された。日本人教員についても、舎監が園部寅吉に代わったほか、新たに史学に久米邦武、撃剣に千葉之胤、心理学に松本亦太郎、論理学に松本文三郎、英書訳読に河島敬蔵、物理・地文に水島久太郎、法学講師に齋藤十一郎を増員した。⁽²³⁾

学内体制に関しては、一八九二年の『規則』によると、修業年限五年の高等普通科に加えて、高等小学校の卒業者もしくは同等の学力を持つ者を教育するため、二学年で構成する少年科を設置した。⁽²⁴⁾さらに、一八九三年度

には少年科の二年を「幼年科第一年級」と「少年科第二年級」に名称を改めた。⁽²³⁾

一八九四年になると、少年科を修業年限一年の補充科と改称するとともに、五年制の普通科履修者に専門学を教授する三年制の専修科を新たに設けた。その結果、立教学校は、一八九四年九月から補充科、普通科、専修科の三部構成となった。⁽²⁴⁾このうち専修科の「学課」と「修業時間」は、次のような内容である。

・初年度……史学（週四時間）、論理学（週二時間）、心理学（週四時間）、道義学（週五時間）、英文学（週五時間）、ドイツ語（週七時間）、ギリシャ語（週五時間）

・次年度以降……国文学、漢文学、フランス語、ラテン語、ヘブライ語、哲学史、哲学、社会学を「増置」する予定。履修学課は週一五時間（授業時間のうち英文学とドイツ語は五時間を三時間の割合に縮算する）⁽²⁵⁾

一八九四年九月にも外国人・日本人教員の増員が行なわれた。これは、一八九三年の立教学校運営委員会で英語の校名をセント・ポールズ・スクールからセント・ポールズ・カレッジに変更したことからわかるように、立教学校が専修科を設置してカレッジ事業を展開する必要性によるものであった。⁽²⁶⁾

四 新築校舎計画と渡米募金運動

一八九四年六月二〇日、マグニチュード七・〇の東京大地震が発生し、⁽²⁷⁾東京市の下町を中心に大きな被害をもたらした。立教学校でも建物に損傷を受け、校舎の三階と中央の高塔が崩壊した。

じつは、この校舎の階上部分は建築後に増築されたもので、もともと校舎の基礎が高層建築に耐えられない構造であった。東京府技師に建築検査を依頼したところ、「基礎堅固ナラズ危険ノ恐れアル」と確認されたため、すでに寄宿生は小田原町、新栄橋の西部に移されており、地震発生時は教室のみに使用していた。

一八九三年一〇月一三日の立教学校理事会では、校舎の新築を議決し、その位置を築地居留地五七、五八、

五九、六〇番に選定した。そして、同年二月二日付でアメリカ聖公会宛に校舎新築費義損金募集の文書を送付した。それによると、もし地震が起これば崩壊する危険性があるため、本校舎、講堂、実験室二個、事務室、職員室、応接室、教室一二、寄宿舎（九六人収容）を新築する資金として、総額二万七〇〇〇ドルを求めている。これに対して、一八九四年二月一日のアメリカ聖公会内外伝道協会理事会は、この目的で十分な特別献金が与えられない限り、海外ミッションの一般資金からは提供する余裕がないと決議した。⁽²³⁾このため、校長ティンゲは寄付金募集の目的で、一八九四年春にアメリカへの渡航に踏み切った。⁽²⁴⁾同年六月の東京大地震は、こうした状況下で発生したのである。

地震当日は、学年末試験後の休日の初日であった。地震発生時、校舎のなかには試験答案を採点していた二人の教員がいた。久保田富次郎は落ちてきた瓦礫で頭部を負傷し、玉置角之助は瓦礫の下敷きになって死亡した。⁽²⁵⁾校舎はゆがみ、膨れ上がり、多くは崩れ落ちた。三一大聖堂や三一神学校など他の多くの建物も再建しなればならないほど、大きな損害を被った。⁽²⁶⁾このため、同年九月から立教学校は五〇人の生徒に対して、三一会館（三一大聖堂の会館）で授業を行なう措置をとった。⁽²⁷⁾

その後、ティンゲが滞米中に集めた八〇〇〇ドルによって、新寄宿舎の建築契約が交わされた。⁽²⁸⁾アメリカ聖公会内外伝道協会理事会は、一八九四年九月から一八九五年九月までの年度予算額のほかに、立教学校の建築のため二万三〇〇〇ドルが必要であると訴えている。⁽²⁹⁾

一八九五年春になると、ミッシェン建築家ガーディナーによる新寄宿舎が完成し、復活祭の休暇後に寄宿生が入居した。同年の学生登録者数は五九人となり、⁽³⁰⁾同年六月二五日には九人が卒業、翌一八九六年の立教学校の在籍生徒は一〇〇人ほどへと増加した。⁽³¹⁾

一八九六年にはガーディナーの設計になる六角塔校舎（六角形五層）の新教室棟の増築が開始された。⁽³²⁾築地キャンパスの新築計画がすべて完成したのは、一八九九年であった。⁽³³⁾

第六節 立教尋常中学校の発足

一 高等学校令の衝撃

日本における近代的教育制度の整備の一つとして、一八八六年三月に帝国大学令、同年四月には小学校令、中学校令、師範学校令が公布され、学校制度の改革が行なわれた。これは、小・中学校をそれぞれ尋常と高等の二段階に分け、尋常小学校―高等小学校―尋常中学校―帝国大学という関係を構築したものである。一八九〇年に立教大学校を改組した立教学校は、およそ尋常中学校三年から高等中学校二年に相当し、学校制度上は各種学校であった。

高等中学校には尋常中学校の卒業者が入学することが想定されていたが、実際には尋常中学校と高等中学校の間に大きな教育水準の差があり、尋常中学校の卒業者がそのまま高等中学校に入学することはきわめて困難であった。そのため、全国に七校設置された高等中学校は、いずれも予科などを設け、予備教育を施さなければならなかった。尋常中学校の卒業者のなかには、これら予科の最下級に入学した者も少なくなかった。

また、高等中学校では外国語教育が最も重視されていたため、日常英語に接することが多いミッシェン・スクールの生徒は進学に有利であった。各種学校である立教学校の場合も、学校制度に位置づけられていなかったものの、上級学校（高等中学校）に進学することができた。立教学校の生徒にも途中で高等中学校に入学する者がいたようであり、立教学校には進学準備教育としての機能への期待も寄せられていた。

ところが、一八九四年に高等学校令が公布されたことにより、こうした状況に大きな変化がもたらされた。高等学校令は、従来の高等中学校を高等学校に改め、その入学者資格を「尋常中学校卒業ノ程度ニ依ル^⑤」と規定すること、尋常中学校と高等学校との接続関係を確立したのである。これは、尋常中学校以外の教育ルート、た

たとえば各種学校などで学んだ者には、上級学校へ進学する道が閉ざされたことを意味していた。つまり、それまでは立教学校の卒業生でも高等中学校や官立の専門教育機関に進学することが可能であったが、高等学校令公布後の学校制度のもとでは、立教学校の卒業者は高等学校に進学できなくなったのである。⁽²⁶⁾

さらに、諸学校令と同じ一八八六年に改正された徴兵令によって、正系の学校制度に位置づけられた私立学校には、公立学校と同様の兵役上の特権が与えられることになった。したがって、立教学校が各種学校のままでは、生徒たちは兵役上の特権を受けることができないのである。

こうした状況は、立教以外のミッシヨン・スクールも同様であった。青山学院では、一八九六年に予備学部を尋常中学部に改め、高等学校などの学校との接続関係を確立した。また、明治学院普通学部も、一八九八年に尋常中学部への改組を行なった。

二 立教尋常中学校・立教専修学校・東京英語専修学校

立教学校では、一八九四年に補充科・普通科・専修科の三部構成を採用したのに続き、一八九六年には創立以来の慣行であった新年度始業を九月から四月に移行した。同時に、立教学校（総理ティング）を立教尋常中学校（校長左乙女豊秋）と立教専修学校（校長ティング）に改組した。このうち立教尋常中学校について、中等学校令にもとづく尋常中学校として、同年に文部省に認可申請を行なったが、居留地内にあることを理由に正式認可は得られなかった。⁽²⁷⁾ 改めて、一八九八年一月二五日に居留地第五四、五五、五七、六〇番地所在の家屋を私立立教尋常中学校とする設置願いを提出したところ、同年四月二日に認可を受けた。⁽²⁸⁾ これにより、立教尋常中学校の生徒は上級学校への進学の道が開かれ、生徒数も一八九七年末の七二人から、一八九八年四月には一四〇人へと倍増した。⁽²⁹⁾ なお、立教専修学校は各種学校の扱いのままであった。

この間、神田錦町二丁目六番地の東京商業学校の校舎を借り受け、一八九六年に学内に設置していた英語部を⁽³⁰⁾

一八九七年六月に移転させた。さらに、同年八月にはこの英語部改称の東京英語専修学校を各種学校として設置することを東京府知事に申請し、九月に開校した。⁽²⁸⁾こうして、立教学校 (St. Paul's College, Tokyo) は、立教尋常中学校と各種学校の立教専修学校と東京英語専修学校による新たな三部構成になった。

三 立教学校新総理アーサー・ロイド

一八九七年一〇月に立教学校総理 (President of the St. Paul's College, Tokyo) ティングは辞職し、その後任として、同年一二月末にはアーサー・ロイド (Arthur Lloyd) がマキムによって立教学校の新総理に任命された。以後、ロイドが立教の教育を主導する立場に就いた。⁽²⁹⁾

一八九三年に東京伝道主教に就任したマキムは、一八九四年当初から慶應義塾時代のロイドの教育手腕を高く評価しており、できるだけ早期にアメリカ聖公会日本ミッシェンの教育事業をロイドに委任したいと考えていた。こうした方針に沿って、一八九四年にロイドはマキムの措置により日本での現地採用宣教師となり、一八九七年一月九日にはアメリカ聖公会理事會が正式に雇用する宣教師として認可された。これを受けて、一八九七年一二月末にマキムはロイドを立教学校新総理として任命したのである。⁽³⁰⁾

アメリカ聖公会日本ミッシェンの月刊機関誌である『チャーチ・イン・ジャパン』(THE CHURCH IN JAPAN) の一八九七年一二月号は、次のようにロイドの立教学校総理への任命を報じている。

ロイドはティングの帰米によって空位となる立教学校 (St. Paul's College) の総理に任命された。新年一月の新学期の最初から就任するであろう。東京帝国大学以外では日本で最も重要な教育機関である慶應義塾に長期間奉職し、そこで影響力をもたらしながら、ロイドは彼自身の能力と熟練した学問に加えて、彼の経験と威信をうたがいなく立教の日本人学生にもたらすであろう。それは大きな価値がある。⁽³¹⁾

また、アメリカ聖公会伝道機関誌『スピリット・オブ・ミッシェンズ』の一八九八年二月号は、ロイドの立教

学校総理への就任について、ロイドの日本における一四年間の伝道・教育活動は、どちらの能力においても、どのような地位においても、資格があることを証明している、とのマキムの言葉を伝えた。⁽⁸⁾